



徳島大学渭水会々報

第44号

発行/徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中 双鶴 氏



「circulation」

上月 佳代 氏

ゴミとなった物質がリサイクルされて循環し、再び製品に生まれ変わり、ぐるぐる廻るというイメージで作品を造りました。作品の造形は、ゴミステーションのロゴマークの楕円の形にヒントを得て、木材を立体的に構成した抽象作品にしました。材料は上勝町内の山中にある間伐材です。 関連記事→P18

2015年11月発行

目 次

会長ご挨拶 徳島大学入学式・卒業式での渭水会 渭水会会長 石井 博	3
学部長ご挨拶 徳島大学の大学改革プランと総合科学部の改組 総合科学部長 平井 松午	4
総合科学部では今 (26)	
新・総合科学部 社会総合科学科 (4コース) の概要 総合科学部長 平井 松午	5
Topics 総合科学部2号館 (地域連携プラザ) に臨時「モラエス館」開設 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授 石川 榮作	6
特集 輝く新星 ～第1回渭水会会長賞～	8
● 大学を卒業してはや4か月経ちました 山田 梨加 ● 大学生活を振り返って 坂東 玲子	
連載② 私の職場 My Workplace 女性警察官として 小川 仁美	12
進路通信 求人票を送付ください (2) 総合科学部卒業生の進路 就職委員長 小山 晋之	14
連載⑥ 感動が人間を育てる 人との出会い 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授 石川 榮作	15
研究最前線③ 微量汚染化学物質の水環境中動態と生態リスクの評価 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授 山本 裕史	16
国民文化祭に参加して 上月 佳代	18
教育を考えるために 関西学院大学 教授 南本 長穂	20
かけがえのない5年間 大宮 俊恵	21
若手研究者学長表彰制度による学長表彰式が行われました	22
総科のおたから [其ノ参] 徳不孤	23
連載⑥ Let's sports! 日本拳法とは? 和田 慧介	24
スタートライン	26
● 徳島大学大学院生としての「今」 都築 弘充 ● 今思うこと 三浦ゆかり ● 新たなスタートライン 立田 彩和	
[エッセイ]	29
● タイ王国からの留学生と阿波踊り 室蘭工業大学しくみ情報系領域 准教授 須藤 秀紹 ● 一生チャレンジ 桑原 幸子 ● 草創期の恩師を偲んで 山田 秀雄	
[助成事業]	34
● 高校・特別支援学校総会並びに講演会 部会長 井上 薫 ● 渭水会教育課題研究会 竹内 照記	
総科ニュース	46
徳大ニュース	48
編集後記	51



渭水会会長
いし い ひろし
石井 博

徳島大学入学式・卒業式での渭水会

「徳島大学渭水会」会員の皆様方におかれましては、日頃より本会発展のためにご支援ご協力を頂き誠に有り難うございます。心より感謝申し上げます。

さて、徳島大学には、八団体の同窓会組織があります。この組織が徳島大学と定期的に会議を行っております。そして、昨年10月の会議で、入学式・卒業式の中で同窓会より祝辞を述べる事が決まりました。

祝辞は、同窓会の設立年度の早い順番に持ち回りで、各会長が担当することとなりました。そして、平成26年度卒業式の祝辞を、渭水会より述べることになりました。

3月23日、アスティとくしまで二階席がほぼ満席となるほど多くの保護者の参加を得て、卒業式が厳粛に挙行されました。

私が述べた祝辞の一部を紹介させていただきます。

〔(前略)徳島大学は、徳島師範学校、徳島工業専門学校、徳島医科大学を統合して、昭和24年に、現在の徳島大学が誕生しました。以来、65年になりますが、この間の卒業生は、学部生が約5万2千人、大学院生が約1万4千人となっており、多くの先輩があらゆる分野で活躍をされています。〕

とりわけ、昨年は、本学工学部卒業生である中村修二氏が、青色発光ダイオードの開発により、ノーベル物理学賞を受賞されたことは、記憶に新しいところであります。

このことは、徳島大学の名誉を高めるばかりでなく、学生の皆さんや教職員の方々、我々同窓生としましても、この上ない誇りであり、勇気を与えてくれたものと感じております。

そして、夢をあきらめずに努力することの尊さと、努力は必ず何らかの形で報われること、地方の大学からでも、世界に通用する発明・発見が可能であることなど、たくさんのごことを証明してくれました。

振り返ってみますと、我々も卒業して何十年もたちますが、何かあるたびに、青春の一時期を過ごした、徳島大学のキャンパスや友人、恩師のことを思い出します。

それだけ母校というのは、時には懐かしくもあり、時には心の支えにもなってくれる、大変ありがたいものです。

これから社会に出て働かれる方、大学院へ進まれる方、研究を続けられる方、それぞれの道は決して平坦なものではないかもしれませんが、どうか、夢と希望を持ち、努力を惜まず、自分を信じて、存分に力を発揮して欲しいと願っております。(後略)〕

このように、卒業生の皆さんの、今後益々のご活躍を祈念して祝辞を述べさせていただきました。

また、卒業式後には、場所を総合科学部に移し、本年度より創設した渭水会会長賞の表彰式を行いました。

これは、学業成績優秀で、研究活動及び学生としての活動全般について、模範となる優れた学生を渭水会として表彰するものです。

この度は、学部より推薦していただいた3名の方を表彰いたしました。

そして、4月5日。同じくアスティとくしまで入学式が挙行されました。今回は、医学部の同窓会会長が祝辞を述べられました。卒業式同様、二階の保護者席はほぼ満席となり、私たちの時代の式典とはずいぶん違った雰囲気の入学式でした。入学式後に場所を総合科学部に移し、新入生へのオリエンテーションの中で、同窓会組織渭水会の紹介をさせていただきました。

最後に学部再編では、会員の皆様にご心配をおかけしておりますが、終身会費をいただくときに託されました同窓会へのご期待に応えるよう引き続き取り組んで参ります。今後とも皆様方のご理解ご協力のほど、よろしく願いいたします。

(昭和49年 中学校課程保健体育科卒)



総合科学部長
ひらい しょうご
平井 松午

徳島大学の大学改革プランと 総合科学部の改組

すでにマスコミ報道や徳島大学のホームページなどでご存じの方も多いかと思われませんが、平成28年(2016)4月に、常三島地区の総合科学部と工学部は改組し、新たに生物資源産業学部を創設するとともに、工学部は理工学部へ改組し、総合科学部も現行の3学科を1学科へ改組することになりました。

これに伴い、現行の総合科学部から、理系分野の教員が理工学部や生物資源産業学部へ、また一部の教員が新設される教養教育院にそれぞれ専任教員として配属することになりました。「総合科学部」の名称自体は変わらず、改組後の新・総合科学部については主には文系教員を中心とした学部(社会総合科学科)となりますが、本年度(平成27年度)の入学生が卒業する平成30年度までは、現行の教育カリキュラムを維持することになります。すこし複雑ですが、しばらくは総合科学部の旧課程(3学科)と新課程(1学科)が同居し、旧課程についてはこれまで通り理系の先生方も総合科学部の授業を担当されることとなります。また、今回はあくまで学部改組であり、大学院総合科学教育部の名称や教育プログラムには変更はありませんが、4年後の平成32年度までには大学院の再編にも着手することになるものと思われます。

明治7年(1874)5月1日発足の徳島師範期成学校を継承してきた徳島師範学校、徳島大学学芸学部・教育学部、そして昭和61年(1986)発足の総合科学部が刻んできた140年を超える歴史の中で、最も大きな組織改革の一つが、今回の徳島大学(常三島地区)改革プランであるかもしれません。

徳島大学改革プランは、平成25年11月に文科省が打ち出した国立大学改革プランにもとづくものです。国立大学改革プランは、社会的要請の高い「イノベーション創出」や「グローバル化」をキーワードに国立大学における理工系人材の強化を目指す政府の政策ですが、その背景には財界・産業界の後押しがあります。政府は、国立大学改革プランを推し進めるために、第3期中期計画(平成28~33年度)では運営交付金の削減も明言しています。

他方で、文科省はアカデミズムを追求してきた教員養成系、人文社会科学系の学部については、組織の廃止や

社会的要請の高い分野への転換を謳っており、現在、地方国立大学ではいずこも人文社会系学部や教育学部、工学部を中心に組織再編とそれに伴う新学部の設置が進められています。その是非はともかくも、実務能力の高い人材を社会に送り出すことで、グローバル化時代における日本の競争力を高めたい、改革を加速化することで実効性を担保したいとする現政権の思惑が端的に表れているとも言えます。もちろん、我々も、社会が求める人材養成に努めてきたかと問われれば、見直す点も少なくありません。それゆえ、近年はキャリア教育を取り入れ、新・総合科学部では実践学習科目を新たに導入して、社会と連携した教育プログラムを実践していきたいと考えています。

しかしながら、日本ではこれまで、教養教育を重視するリベラルアーツやアカデミズムを追求する専門教育、医療系・工学系学部のような専門職業人・技術者養成教育が同居する形で大学教育が展開されてきました。徳島大学においてリベラルアーツやアカデミズム教育を担ってきたのは、言うまでもなく総合科学部であり、そうした教育の下に幅広い知識や洞察力、実践力に裏付けられた人材こそが、21世紀社会には不可欠と考えています。今回の総合科学部の改組により、そうした大学教育の使命が削がれることなく、新学部においてもこれまで培われてきた教育理念の実現に努めていきたいと考えています。

学芸学部・教育学部・総合科学部の卒業生の皆様には、今回の改組により、同窓会組織である渭水会や各教室・研究室の同窓会のあり方について不安を抱かれる方々も少なくないかと思えます。この点で、卒業生の皆様には大変なご心痛をおかけすることになり、心より申し訳なく思っています。本年度の入学生(現行課程の最後の学年)が卒業するのは平成31年3月となりますが、皆様の不安を少しでも払拭していきたいと考えています。

最後になりますが、今後は総合科学部のみならず、理工学部・生物資源産業学部ともども、全国各地で活躍されている卒業生や渭水会会員の皆様からもご支援いただけるような教育を進めていきたいと思っています。何とぞ、ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

今

新・総合科学部 社会総合科学科(4コース)の概要

総合科学部長 平井 松午

平成28年(2016)4月、総合科学部は国際教養コース、心身健康コース、公共政策コース、地域創生コースの4コースからなる社会総合科学科の1学科(学生定員170名)として再出発します。新学部の教育目標は「人文・人間・社会・地域・情報等の諸科学における専門知識や専門技能、技術を身につけるとともに、専門分野の融合を図ることでグローバル化する現代社会の諸問題や地域課題を的確に理解し、問題解決に対応し得る実践的な人材を養成する」ことにあります。この点で、総合的な視点を備えた人材育成という総合科学部の教育理念は継承されます。

具体的には、「国際教養」「心身健康」「公共政策」「地域創生」の4つの専門コースを設けて、グローバルな視点から諸課題についての的確な考察・分析ができ、地域や社会をコーディネート・マネジメントできるジェネラリストを養成したいと考えています。

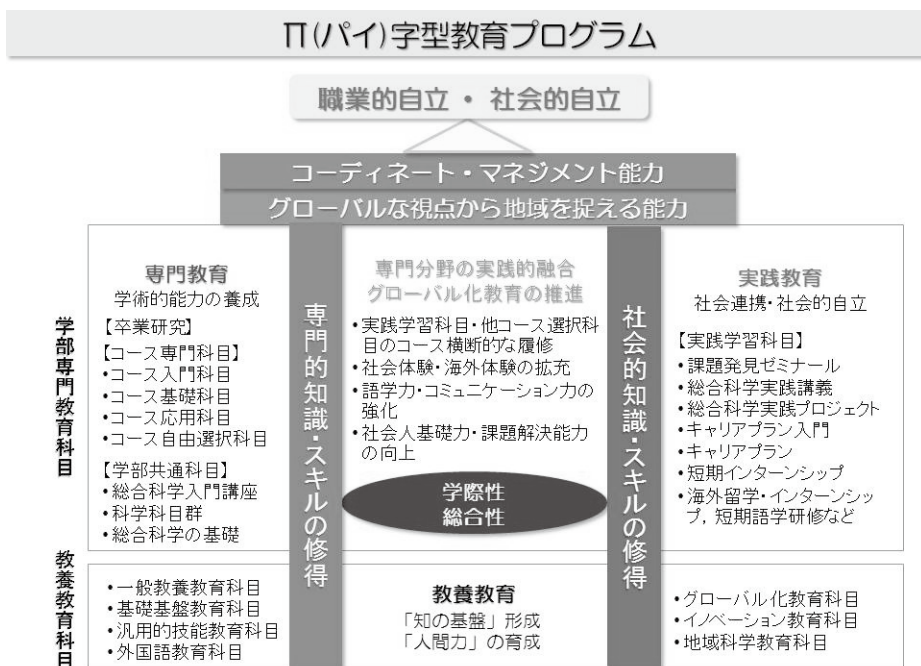
そこで新・総合科学部では、2年次に配属となる4つのコースで専門的な知識やスキルの修得に重きを置く一方、社会から求められる汎用性の高いテーマ別の「実践学習科目」を展開し、コース専門科目との連携を深める「π(パイ)字型教育プログラム」を展開します。

「実践学習科目」は、コース横断的な履修を通じて、総合的な視野と実践的な学修体験を養うものです。具体的には、学内外の国際(交流)センターや行政・自治体、団体・NPO等との連携・協働あるいはフィールドワークなどを通じて実際に現場に赴いて課題解決に取り組むことで、基礎的知識を社会現場で再確認するとともに、課題解決能力を育成する実践型授業科目と位置づけています。

また、グローバル化教育にも取り組みます。その一環として、学部共通科目にAcademic Englishなどを設けるとともに、海外体験をテーマとした総合科学実践プロジェクト科目を開設します。また、4年次進級要件に一定の語学検定成績・資格取得を課すとともに、新たに設置する「国際教養コース」では英語で行う授業科目を10科目以上に拡大し、海外からの留学生とともに学べる学修環境をつくっていきたく考えています。

新・総合科学部の概要や入試情報については、徳島大学HPの次のサイトに掲載されています。総合科学部卒業生の皆様、涓水会会員の皆様には、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

http://www.tokushima-u.ac.jp/new_faculties/science/



Topics



神戸領事時代の
モラエス

テレビ・新聞等で報道されましたので、ご存じの方も多しことかと思いますが、徳島市眉山山頂にありました「モラエス館」は、本年(2015年)3月末をもって廃館となりました。徳島市によりますと、その老朽化した「モラエス館」を解体し、同場所に新しい観光展望施設を建設するとともに、既設の展望休憩施設の改修も行っており、「眉山魅力アップ計画」を進める予定で、来年秋の竣工後には、「モラエス館」は改修後の展望休憩施設に移設されることになっています。その間、晩年を徳島で過ごしたポルトガルの文人モラエス(1854-1929)の貴重な資料を市内のふさわしい場所に展示してほしいとの要望が市民の間から出されて、いろいろと検討の結果、最適な候補として浮かび上がってきたのが、徳島駅前のアミコビル1階のほかには、徳島大学総合科学部2号館(地域連携プラザ)です。さっそく原秀樹市長から香川征大学長あてに施設使用許可願いが出されて、役員会での承認を経て、総合科学部に臨時「モラエス館」が来年秋まで開設されることになったのです。その開設に関わった者として、ここでその臨時「モラエス館」の紹介をしたいと思います。

まず総合科学部2号館(地域連携プラザ)が昨年度増築されたことについては、本会報第43号の「総合科学部では今」(25)でも報告しましたが、その地域連携プラザ「常三島けやきホール」の真下1階に多目的室1があります。展示会などをするのに適した73平方メートルの広さの教室ですが、そこが臨時「モラエス館」です。本年5月30日(土)のモラ

総合科学部2号館 (地域連携プラザ)に 臨時「モラエス館」開設

大学院ソシオ・アーツ・アンド・
サイエンス研究部

いしかわ えいさく
教授 石川 榮作



旧モラエス館(眉山山頂)

エス誕生日にオープン・セレモニーを行い、それ以降、毎週水曜日13時より17時15分まで開館しているほか、「けやきホール」でイベントが行われている土曜日・日曜日にも13時より17時15分まで開館しています。総合科学部モラエス研究会の教員のほか、とりわけ徳島日本ポルトガル協会からの協力を得て、ボランティアによる来館者への解説などのサービスを行っています。入場料はもちろん無料です。観無料で感無量といったところでしょうか。



モラエス直筆の絵ハガキと銅像レプリカ



モラエスの居間

徳島駅前アミコビル展示場では、オープンスペースのためモラエスの書籍などを中心に展示していますが、この徳島大学ではモラエスの遺品など貴重な資料が多いのが特徴です。見どころは何と言っても、その展示ケースの中の貴重な資料です。最初から順に見ていくと、モラエスの生涯を概観することができます。

展示ケース①モラエス家——生い立ち——では、ポルトガルの首都リスボンにあるモラエスの生家をはじめ、モラエス家の人々が紹介されています。②リスボン時代——旅立ち——では、リスボンからアフリカのモザンビーク勤務を繰り返していた海軍士官時代の貴重な写真が展示されています。③マカオ時代では、マカオ港務副司令官として赴任して以来の写真で、とりわけモラエスが犬を連れている珍しい写真が見られます。④神戸時代では、神戸ポルトガル領事として着任以来の写真が展示されています。⑤徳島時代では、徳島市伊賀町で執筆活動に専念していた晩年のモラエスと周辺の人々の写真が紹介されています。⑥遺品では、モラエス直筆の原稿や手紙の封筒などが並べられています。⑦遺品の中には、モラエスが使っていたハガキ入れや小もの入れのほか、名刺まであります。⑧遺品での見どころは、モラエスとおヨネとコハルの遺髪でしょう。そのほか入院中のコハルの枕元に置いていた時計と、神戸時代に被っていた山高帽もあります。そのほか普通には見られないものもありますので、是非、一度ご覧ください。

展示ケース内の展示物も貴重なものですが、入口から入って左側に展示しているモラエス直筆の絵はがきパネルのほかに、展示室の一番奥のコーナーに再現している「モラエスの居間」も見どころであることは、言うまでもありません。西窓を開けたら眉



モラエスの遺髪の
展示ケース

展示ケースの中に貴重な写真等を展示。この展示の後ろにモラエスの居間がある



山が眺められるという2階8畳のこの「居間」を書斎として、モラエスは小さな机にすわって『徳島の盆踊り』や『おヨネとコハル』そして『日本精神』などを執筆しました。畳の上に火鉢など身の回りのものも再現されています。鴨長明の『方丈記』を髣髴とさせるような質素な部屋で、当時のモラエスを理解するためにも貴重な部屋と言えます。

最後に、入口から入って真正面の壁際に実物大のモラエス像を置いています。これは眉山山頂の「かんぼの宿」近くの公園にある故徳島大学坂東文夫教授による「モラエス銅像」のレプリカです。特別に借り受けて、臨時「モラエス館」に展示しています。どうぞ（銅像）見に来てください。

この機会に学生のみならず、地域の方々にも是非ご覧いただき、モラエスのことを知って、「モラエス顕彰を通して地方創生」に貢献できればと思っています。原則、毎週水曜日の13時から17時15分まで、「けやきホール」で何かのイベントがある場合には土日にも開館しますが、その開館・閉館については、前もって総合科学部ドイツ語・ドイツ文学石川研究室（電話088-656-7142）にお問い合わせください。

INFORMATION

●モラエス館

場所／総合科学部2号館（地域連携プラザ）1階

開館／毎週水曜日 13:00～17:15

※けやきホールでイベント開催時には臨時開館あり

問合せ／総合科学部ドイツ語・ドイツ文学石川研究室

Tel 088-656-7142

輝く 新星

第1回
涓水会
会長賞

平成26年度より、創設された「涓水会会長賞」。これは、学業成績優秀で研究及び学生としての活動全般において、模範となる優れた学生に対して贈られるものです。平成27年3月23日(月)12時50分より、総合科学部1号館第2会議室において表彰式が行われました。



受賞者の皆さん。
左から山田梨加さん、大野佑花さん、坂東玲子さん

映えある第1回涓水会会長賞の受賞者は
山田梨加さん（総合理数学科 数理科学コース）
大野佑花さん（人間文化学科 心理・健康コース）
坂東玲子さん（社会創生学科 地域創生コース）。

石井 博会長より、表彰状と賞金が手渡され、その後、石井会長より、はなむけの言葉として作家・吉川英治の言葉「我以外皆我師」を引用して「学び続けることの大切さ」についてお話がありました。

充実した学生生活を送った満足感や達成感、そして未来への希望に輝く笑顔がとても印象的でした。

——卒業からはや半年。新しい社会で奮闘する3人に、大学生活を振り返ってもらいました。

徳島大学総合科学部涓水会会長賞表彰要項

(目的)

第1条 学業成績優秀で、研究活動及び学生としての活動全般について、模範となる優れた学生を表彰する。

(表彰人数)

第2条 学部学生3名とする。

(表彰者の選考)

第3条 4年次前期終了までの成績・研究・社会活動等に基づいて行う。

第4条 次の基準に該当し、人物優秀な者について行う。

- (1) GPA上位者
- (2) 研究活動、社会活動等で優れた業績を有し、他の学生の範となる者

(表彰の決定)

第5条 表彰の決定は、学部長が招集する選考委員会で協議し、涓水会会長に推薦し、決定する。

(表彰の時期等)

第6条 表彰は、4年次後期に涓水会会長が行う。副賞として1名につき5万円を給する。

附 記

- (1) この要項は、平成26年6月7日(土)の総会で決定し、同年度より実施するものとする。
- (2) この要項の改廃は、総会の議によって行うものとする。

★ 大学を卒業してはや4ヵ月経ちました

た



やまだ りか
山田 梨加



市役所の新任研修にて

私は、平成27年3月に徳島大学総合科学部総合理数学科数理科学コースを卒業し、4月からは地元の市役所で職員として頑張っています。徳島大学を卒業してから4ヵ月しか経っていませんが、私を取り巻く環境は大きく変わり、少し前まで大学生だったということが嘘のように感じます。

大学生活を振り返ってみると、徳島大学で過ごした4年間は私にとって大変有意義な時間であり、貴重な思い出です。大学を卒業し、新社会人として働きはじめたからこそ思うことはたくさんあり、そのなかで学生の皆さんに伝えたいことが大きく二つあります。一つ目は、人との出会いを大切にしてほしいということです。私が今こうして市職員として働いていられるのは、学科の友人をはじめ、さまざまな人に支えていただいたおかげです。いろんな人が支えてくれたおかげで、辛いことも乗り越えることができ、地元の市職員になるという夢を掴み取ることができました。大学で出会った友人や教授とは、大学を卒業し社会人となった今でも連絡をとり近状報告をするなど、お互いに刺激し合っています。学生の皆さんには、これまでに出会った人、大学で出会った人を大切にしてほしいと思っていますし、これからの出会いも大切にしてほしいと思っています。

二つ目は、いろんなことに挑戦してほしいということです。働きはじめると、自分のやりたいことを好きなだけできるような、そんな自由な時間が限られてきます。限られた時間の中でやりたいことをし

ようと思っても、実行できないことが多くなってきます。自由に使えるたくさん時間があるということは、学生時代の特権です。だから、学生の皆さんには、学生生活の中で、たくさんことに挑戦してほしいと思っています。読書をしたり、友人と海外に旅行に行ったり、資格や外国語の勉強に取り組んだりなど、学生のうちでしかなかなか没頭できないことはたくさんあります。頭をフル回転させて、いろんなことに挑戦し、今しかない学生生活を有意義に過ごしてください。

現在、私は地元の市役所で防災に関する課に所属しています。まだまだ覚えることがたくさんあり、先輩職員や上司にご指導をいただきながら、日々の業務に取り組んでいます。慣れないことばかりで大変な時もありますが、周りの人たちに助けていただき、時には刺激を受けながら、楽しく仕事をしています。まだまだ半人前ですが、一日でも早く一人前の職員になるために、早く仕事を覚え、たくさんの知識を身につけていきたいと思っています。また、仕事面だけでなく、人間的にも一人前になれるよう、日々研鑽していく所存です。そして、市民の皆さんに寄り添い、地元で貢献できる市職員になれるよう、たくさんを学びながら経験を積んでいこうと思います。

最後になりましたが、この度は徳島大学渭水会々報に寄稿できる貴重な機会を与えてくださり、誠に感謝しております。最後まで読んでいただきありがとうございました。

(平成27年 総合理数学科数理科学コース卒)



公務員勉強テキスト

★ 大学生生活を振り返って



ばんどう れいこ
坂東 玲子

平成27年徳島大学卒業の際に渭水会会長賞を受賞し、このたびこうして執筆の機会を与えて頂きました。5年間という大学生活で、私は様々なことに挑戦いたしました。中でも私の大きな転機となった2つの経験があります。1つ目はNYで阿波踊りを広める活動「Home Island Project」(以下HIP)でのリーダー経験。そして、2つ目はDisney College Programへの参加経験です。

これらの経験はすべて英語に関するものでもありません。総合科学部には「English Support Room」という部屋があり、英語に興味があった私は、入学してすぐに友人と毎日通うようになりました。そこには素敵な英語の先生、そして英語が話せる先輩がたくさんいらっしゃって「ああ私もこんな風に英語が話せたらなあ」なんて思っていたのが1年生のころでした。今思えば、この時期に英語力の下積みをしていたように思います。

一つ目の転機、HIPと出会ったのは2年生の春でした。先輩が参加されるのをきっかけに、即座に仲間に入れてもらいました。プロジェクトの目的は単純明快で徳島・四国の魅力をNYで発信するというものでした。そのために、阿波踊りの練習に皆で通い、徳島の有名な物産を集めにたくさんの社会人の方々に協力していただきました。こうして、徳島や東京、NYで活躍されている方に知り合うことができ本当にたくさんの刺激を受けました。その後2年間このプロジェクトリーダーを務め、自分が主体となり物事を動かす難しさを痛感し、皆と一緒に一つのプロジェクトをたいへんさ、大切さを学びました。

そして二つ目の転機、Disney College Programへの参加です。このプログラムは5ヶ月間、米国フロリダ州にあるWalt Disney Worldにてインターンシップができるというものです。このプログラムへの参加は前例がなかったため、ほとんど情報がないままプログラムへの受験に臨みました。大好きなディズニーについての勉強はまったく問題ありません



Walt Disney Worldでのインターンシップ



HIPでの活動。阿波踊りを披露

でしたが、やはり英語レベルには不安がありました。受験日まで先生と模擬面接を繰り返してもらい、とにかく英語をしゃべるということを訓練していました。合格できた時は本当に嬉しかったです。憧れの海外生活、しかも夢の国ディズニー。不安もありましたが、それよりもドキドキわくわくが勝っていました。しかし、現実にはそれほど甘くなくいざインターンシップが始まると予想以上に言語の壁に悩まされました。当たり前の話ですが、英語で仕事をこなすということは簡単なことではありません。ゲストに目の前で「この子英語しゃべれないわね」と言われることもありました。ですが、「仕事にまだ慣れてないからできないのも納得」と前向きにとらえ、毎日笑顔を作り、仕事をしていました。「慣れ(=仕事の習得)」というのは本当で、最初の2カ月間は本当にたいへんでしたが、最後にはマネージャーに「速くて良いサービスができています」と褒めていただきました。英語が母国語の子たちと同じレベルを求められても無理よ!と思いたくなりますが、大事なのはあきらめずにその場その場で必要なことを覚え続け行動し続けることです。このDisney College Programからは「努力は場所を選ばない」ということを学びました。

最後に、この5年間私を支えてくださいました徳島大学の先生方、本当にありがとうございました。そして、今徳島大学で頑張っている皆さん、大学生という自由な時間を使って様々なことへ挑戦してください。努力は場所を選びませんから。

(平成27年 社会創生学科地域創生コース卒)

[連載②]

My Workplace

私の職場

総合科学部が創立されて早や30年。
国内外を問わず多方面の職場で活躍されている
渭水会々員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、
その職場ならではのエピソードを語っていただきました。

警察官

「女性警察官として」

お がわ ひと み
小 川 仁 美

私は、今年4月から、徳島県西部にある美馬警察署で刑事課長として仕事をしています。当署は、以前の美馬警察署とつるぎ警察署が統合して今年2年目を迎え、その管轄は、北は香川の県境まで、南は四国山脈剣山までと、本当に広い範囲が受け持ちとなります。

その中で刑事課とは、テレビドラマでご存じかとは思いますが、県民の方の身近な犯罪である盗難や喧嘩、詐欺や薬物犯罪、また最近流行の振り込め詐欺の捜査などを行っています。

考えてみれば早いもので、私は、平成8年3月に徳島大学総合科学部を卒業し、その年の4月に徳島県警に採用され、今年、20年目を迎えます。大学の頃は、好きだった日本史（近代史）を専攻していました。また、部活は剣道部に所属し、毎日剣道の練習に明け暮れ、朝練があった日などは、眠気と闘いながらの授業だったのを、この間の事のように思い出します。

警察に採用されてからは、大卒は6ヵ月、警察学校に入校し、警察官の基礎となる法学や実務の勉強、剣道等の術科訓練を行います。そして6ヵ月後には一線署に配属され、交番で勤務することになります。警察官の制服を着て、初めて県民の方の前に立ち、ひとりの警察官として対応した時の緊張は今でも忘れられません。

私は、この交番勤務時代に、大切なお金を盗まれて途方にくれている被害者、性犯罪被害に遭い震えていた女性等を目の当たりにし、被害者の為に犯人を捕まえたい、悪いことをしているのに伸う伸うと



暮らしている犯人を許せないと思い、刑事課に進むことに決めたのです。

そして、その希望が叶い、平成11年の春から、徳島東警察署の刑事課で勤務することとなりました。そこで様々な事件を通じ、沢山の被害者や犯人と知り合いました。犯人の中には、当然、許せないと憤りを感じる者もいます。また一方で「罪を憎んで人を憎まず」ではありませんが、やった事は許されない事だったとしても、その背景を考えれば同情を禁じ得ないような者もいました。事件を通じ、色々な人と知り合い、自分自身が成長していった時期でもありました。その後、警察学校の教官、板野警察署の捜査係長、地域課長等を経て現在に至ります。

今春、美馬警察署の刑事課長として赴任し、初の女性刑事課長という事で新聞にも掲載して頂きました。初の刑事課長って意外に思われる方も多いと思うのですが、徳島県で女性警察官が採用になったのは、平成5年からなのです。大きな県では、随分昔から女性警察官の採用もあったそうなのですが、

四国は、ほぼ同時期に採用が始まりました。私は、採用が始まって4期生という立場になります。

現在、全国をあげて女性の登用拡大を図っており、徳島県も採用を増やしているところではありませんが、警察は、まだまだ男社会というのが実情です。その中でも、やる気と目標をもって頑張れば認めてもらえる、やりがいがある仕事でもあります。20年の警察人生の中で、私も結婚もし、出産もし、今もまだまだ子育て中です。常に、家庭と仕事の両立に悩みながらの生活です。女性の登用拡大が図られているとはいえ、やはり、職場や家族のサポートがなければ、仕事が続けられないのが現実です。

それでも警察は、現在、女性が仕事しやすい環境、仕事が続けられる環境を整備し、年々、新しい制度等が取り入れられています。だからこそ、職場や家族のサポートに感謝し、精一杯頑張ろうと思っています。男だから、女だからと背伸びするのではなく、自分らしく、自分に出来ることをやっていこうと考えています。

警察の仕事には、刑事警察の他にも、交番や自動車警ら班（パトカー乗務）を受け持つ地域警察、交通事故防止のため活動する交通警察、防犯活動や少



美馬警察署

年事件等を担当する生活安全警察や、災害活動や外国人犯罪を担当する警備警察等、様々な仕事があります。これらの係が一丸となって、県民の皆様が安全・安心な暮らしができるよう努力しております。これからも、警察活動にご協力をお願いします。

最後になりましたが、今考えると、大学生生活の4年間は、人生にとって本当にかげがえのない時間です。その時の経験が、今でも自分の人間形成に大きく影響していると思います。学生の皆さんは、大学生活を大切に、色々な事にチャレンジしてほしいと思います。

(平成8年 総合科学科文化コース・ピークI 人文研究卒)



さまざまな職種・職場を紹介していきたいと思います。
ご寄稿、ご紹介お待ちしております。

進 | 路 | 通 | 信

求人票を送付ください



こやま くにゆき
就職委員長 小山 晋之

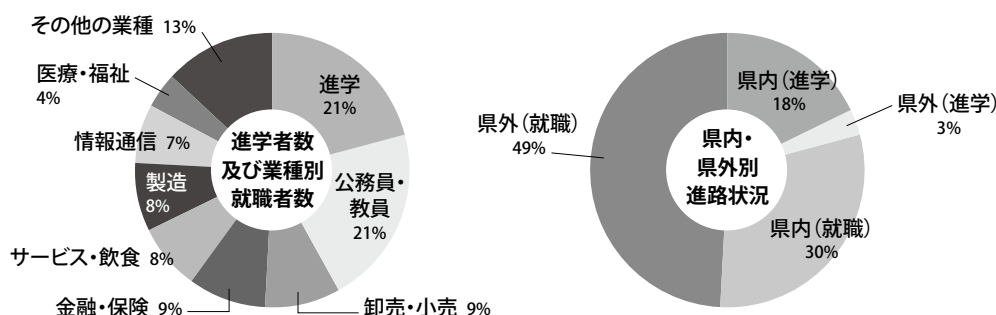
総合科学部卒業生の進路

下の表は平成24年度から平成26年度までの総合科学部卒業生の進路状況の推移を示しています（平成23年度以前のデータは涓水会々報第41をご参照ください）。

この3年間で卒業生、進学者、そして就職者の平均はそれぞれ250.3人、39.3人、175.3人でした。また卒業生に対する進学決定者の比を意味する進学率を単純に平均すると（全体の合計数から求めた比率も）15.7%でした。一方、就職希望者に対する就職者の比を意味する就職率を同様に平均すると（全体の合計数から求めた比率も）97.0%であり高い値を示しています。特に平成26年度の就職率は98.3%の高率でした。

年度	卒業生			進学者			就職者			進学率 (%)		就職率 (%)	
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	男	女
H24年度	111	155	266	13	26	39	80	104	184	14.7	16.8	97.9	98.8
H25年度	97	140	237	22	12	34	62	107	169	14.3	8.6	94.9	96.9
H26年度	100	148	248	24	21	45	63	110	173	18.1	14.2	98.3	98.4

次の図表は平成26年度の卒業生（248人）の進学者数（45人）と就職者数（173人）の内訳です。進学あるいは就職した卒業生の総数は218人でした。公務員・教員は47人（21.6%）で最も多く、次いで進学が45人（20.6%）、金融・保険と卸売・小売がともに19人（8.7%）と続きます。また就職は県内（30.3%）より県外（49.1%）の方が多く、進学は逆に県外（3.2%）より県内（17.4%）の方が多くなっています。



涓水会会員の皆様には、キャリア支援室まで就職求人票などの就職関連情報をご送付いただければ幸いです。

[送付先]

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地 国立大学法人徳島大学 キャリア支援室(森本、原)

TEL 088-656-7635 FAX 088-656-7636 E-Mail gkseisyu@tokushima-u.ac.jp

人との出会い

感動が人間を育てる



大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授
いし かわ えい さく
石 川 榮 作

徳島大学には最初教養部教員として赴任してきましたが、平成5年には教養部の廃止に伴い、総合科学部の教員となりました。全学共通教育のドイツ語だけではなく、専門科目としてドイツ文学やドイツ・オペラ講読の授業も増えたうえ、翌年からは大学院の授業も担当することになり、年々忙しくなっていくばかりでした。その忙しさは平成16年の国立大学法人化で、さらに拍車がかかりました。これ以上忙しくなったら、どうなるのでしょうか。どこの大学も同じなのだと、そう思いながらも、コツコツと授業や研究に励んでいた頃、総合科学部長を務める羽目になってしまいました。教授会では笑いを振りまく役割を果たしていただけの私が、総合科学部の舵取りをすることになってしまったのです。最初は悪戦苦闘の毎日でしたが、そのうちだんだん慣れてきたのか、結局のところ、2期にわたり4年間、その任務を果たしました。今から思い出すと、よくもこのような中途半端な私が4年間務められたものと、不思議でたまりませんが、しかし、多忙な激務の中でも「忙しい者ほど、多くの時間を持つ」をモットーにして、なんとかその重責を全うするとともに、著書も数冊出すことができました。

そのような激務の中、大きな励みとなったのが、人との出会いでした。どちらかといえば、付き合いが苦手だった私は、学部長となったからには、学内だけではなく、学外のさまざまな人と接しなければならなくなりました。それまで「学問」の世界だけに生きてきた私は、突然「実社会」の中に放り出されたような感じでした。しかし、学外の人と接しているうちに、だんだんと自分の世界が広がっていくのを実感できるようになりました。それも長年苦勞を積み重ねた末にそれぞれの分野で重責を果たしている人たちに会ったからです。そのような素晴らしい地域の人たちの中に、とりわけ次のようなことを信念とされている人がいました。「小川の水も

大きな河の流れも、すべて受けとめて悠然と構えているのが、太平洋であり、何事にも大きな心で対応すること」このことをその人が自分の信念として知っていることを知って、私はたいへん感動しました。「とっさに」故郷の「土佐」から見た太平洋を目に浮かべました。私も太平洋のように悠然と構えなくてはと反省させられました。徳島の人との出会いが、私を育ててくれたと言ってもよいでしょう。人との出会いから受ける感動が人間を育ててくれるのも、確かに真実のようです。



研究最前線

平成27年度総合科学
優秀賞受賞者の先生に
ご寄稿いただきました

微量汚染化学物質の水環境中動態と生態リスクの評価

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授 やまもと ひろし
山本 裕史



この度は第5回総合科学優秀賞をいただき、非常に光栄に思います。受賞に関係する調査研究の成果ならびに近年の研究内容について簡単に説明するとともに、関連の研究の最新動向や小生の活動状況について簡単に報告させていただきます。

まず、受賞した論文2編の研究内容について簡単に説明すると、いずれも医薬品や化粧品など、身近な生活関連の化学物質による水環境汚染の実態についてや、それらの化学物質の魚やミジンコなどの水生生物の生育への有害性（これを「生態リスク」といいます）を調べたものです。この研究は、国立環境研究所から2004年4月に着任後、関澤純教授（当時、2009年退職）のサポートのもとに医薬品や化粧品成分の河川水中での微生物による生分解や太陽光による光分解、土壌や底質（河川など水域の底にある泥のこと）といった研究を始めました。Water Research 誌に掲載された論文は、当時の修士

課程・学部生諸君が取り組んでくれた主要な8種の医薬品の徳島市の下水道未整備の地域を流れる河川水（田宮川や冷田川^{つめた}：図1）を用いた生分解や、総合科学部3号館の屋上での光分解実験、田宮川や鮎喰川^{あき}などの底質を用いた徳島発の研究の成果で、2009年に公表後に130件以上の引用を誇る論文となりました。国立医薬品食品衛生研究所から私より1年前に徳島大学に着任した関澤教授も、最初は医薬品の環境影響に関する研究には懐疑的でしたが、上記の論文のほか、国立環境研究所の鑑迫典久博士^{たたらごのりひさ}らとの共同研究で始めた2007年のメダカ、ミジンコ、緑藻への医薬品の生態リスクを総合的に調べた研究論文、2008年のメダカなどの抗うつ剤の生体内への蓄積の可能性を示す研究論文のほか、文科省科研費や各種財団の研究費を獲得したこともあり、全面的にサポートして下さるようになりました。



図1 徳島市内のフィールド（左：田宮川・蔵本公園付近、右：冷田川・川南橋付近）

受賞対象の2つ目の2011年に発表されたScience of the Total Environment誌に掲載された論文は、シャンプーや化粧品などに多く含まれる防腐剤のパラベン（ヒドロキシ安息香酸のアルキルエステル）類7物質の徳島市内（下水道整備が進まない田宮川、冷田川のほか、中心部で下水道が整備されている新町川など）と、都市部で下水がほぼ完備してい

る大阪市内の河川の汚染状況を比較したものです。またこの論文では、汚染実態の把握だけでなく、メダカ、ミジンコ、緑藻（図2）などへの短期だけでなく長期毒性（メダカへのメス化作用や遺伝子発現解析なども含む）も合わせて評価して、さらに7種のパラベンの生態リスクを足し合わせて評価した部分は新たな考え方といえると思います。



図2 化学物質の安全性評価に用いられる水生生物：左からメダカ (*Oryzias latipes*)、ミジンコ (*Daphnia magna*)、緑藻 (*Pseudokirchneriella subcapitata*) (国立環境研究所HPより)

徳島は非常に美しく豊かな川や海などの水資源・水産資源に恵まれている一方で、下水道の普及率が16%程度（全国平均約77%）と全国最下位であり、浄化槽などを合わせても50%程度（全国平均約90%）と、約半数の家庭からの生活雑排水（トイレ以外の炊事、洗濯、風呂などに使われた水）は処理されないまま近くの川や海に流されている状態です。家庭雑排水の中には洗剤や殺菌剤など、水の中の生物に有害な影響を与える可能性のある物質も含まれることから、浄化槽の整備や点検は今後もきちんと行っていくべきでしょう。

また現在、世界には米国化学会の化学物質登録サイトChemical Abstracts Serviceによると、1億種類を超える化学物質が存在し、これらはわれわれの生活を便利で快適なものにしてくれています。その一方で、これらのうち、生物への有害性がきちんと調べられて、適切な規制が行われている物質は排水規制や環境基準の対象となっている数十種や、PRTR（汚染化学物質排出移動登録）制度の対象

として環境への排出量が把握されている500種弱など、ごくわずかに過ぎません。受賞した論文を含む各種研究をきっかけにして、医薬品をはじめ農薬、新規化学物質など様々な化学物質の生態リスクを評価する様々な国（環境省）の取組みに協力しています。特に、工場排水や下水処理場の放流水、放流先の河川の水にはあらゆる種類の化学物質が複雑に混ざり合っているので、その安全性の評価・管理は化学的な分析だけでは限界があります。そこで、欧米や韓国、台湾などで既に導入されている魚やミジンコ、藻類を使って評価・管理するシステムを国内にも構築するべく、環境省とともに法整備のお手伝いもしています。持続可能で生物多様性の維持された環境や、豊富な水産資源を維持していくためにも、われわれの使用する化学物質を使用した後、どのような経路で環境を汚染し、水の中の魚類や甲殻類（ミジンコのほかエビ、カニなど）、植物などに有害な影響をもたらす可能性があるかを少し考えていただければと思います。



「circulation」 表紙と反対のアングルから撮影。見る角度によって趣が変わる



国民文化祭に参加して

こうづき かよ
上月 佳代



2007年徳島県で第22回国民文化祭・とくしま2007が開催され、県内では、様々な催しが行われました。その一つに、上勝町^{かみかつ}で、2007年10月27日～11月4日までの間に開催された、上勝アートプロジェクト「里山の彩生」があります。上勝町は、^{※注}ゼロ・ウェイスト宣言や葉っぱを日本料理のつま物にする「彩」^{いろどり}農業で全国的に知られており、その様子はドラマや映画にもなりました。

このプロジェクトには、県外から5名の作家が招かれ、それぞれが町内の5地区で地元の町民と一緒に野外作品が造られました。私には、この1年前に、プレ作品を、ゼロ・ウェイストの拠点であるゴミステーションのある斜面に造るという依頼がありました。初めてこの場所に来たとき、私は、この場

所は上勝町の中心にあって、斜面の反対側の道からもよく見える場所であること、さらにゼロ・ウェイストの施設であるゴミステーションや「くるくるショップ」もあって、上勝を代表する場所の一つだと思いました。また作品も「上勝のゼロ・ウェイストを象徴するようなもの」になったらいいなあと考え、作品のコンセプトを“物質がリサイクルされて循環し、ぐるぐる廻る”というようにしました。ゴミステーションのロゴマークの楕円の形にヒントを得て、木材を立体的に構成した抽象作品を考案しました。大きさは、約6m×4m



のもので、題名は「circulation」とつけました。抽象作品の場合には、まず模型を造り、それを拡大していきますが、この作業を上勝町役場の呼びかけにより、1回に約20名が参加する全9回の住民参加型のワークショップで行いました。

上勝町内にあるもので造るというルールがあったため、作品の材料には上勝の山の間伐材を使うことになりました。それには、間伐材を山から降ろすところからのスタートでした。徳島市内で生まれ育った私は、めったに山の中に入る経験もなく、急な斜面から、間伐材を滑り降ろすのは、ほんとうに大変な作業でしたが、とても貴重な体験でもありました。その後は、間伐材の皮を手作業で剥ぐということをしたのですが、これもまた大変でした。そこから、木材の組み立てをするのですが、ほとんどの方が作業の経験がないことと、傾斜地での組み立てで、高い場所に登って作業しなければならない部分もあり、専門家の指導もあったのですが、とても困難な作業となりました。作業が進むにつれて、「安全にできるのだろうか」と不安に思うこともたびたびありましたが、作品の完成にまで至ったのは、参加者のみなさんや上勝町の役場の方々のがんばりと

熱意によるものだと感謝しています。

その後数年が経過し、作品の木材が腐って、朽ちかけていたため、2012年の冬には作品の修復が行われ、真新しいものにしていただきました。特に、木材には含浸処理がされ、10年くらいは、腐らずに材料がもつということです。作品の設置場所には白色のコンクリートがうたれ、遠くから見ても作品が見えやすいように工夫していただきました。またコンクリートの表面には、ゴミステーションから出された、白い陶器の欠片を作品の楕円状の外周にタイルのように敷き詰めました。

私は、多くの人との作品の共同制作が初めてのことで、戸惑いやはがゆく感じることもありましたが、人と協力してひとつのものを作り上げるすばらしさを知ることも出来ました。また、一人で制作する時は、作品は自分のものだと思認するのですが、この作品は、私一人のものではなく、協力してくれたみなさんのものでもあると思っています。そして、ひとりでも多くの人々に作品を観てもらいたいと思っていますので、上勝を訪れたときには是非、ご覧いただきたいと思っています。

(平成8年 総合科学科文化コース・ピークⅡ芸術研究卒)



制作の様子。作品のスケールがよくわかる

※注 ゼロ・ウェイスト

ごみを焼却、埋め立て処理をせず、資源の浪費や、有害物質・非再生可能資源の利用をやめて環境負荷を減らしながら、再生可能エネルギー利用やリサイクルによって、ごみをゼロにする考え方。上勝町は2003年に「ゼロ・ウェイスト宣言」をしている。

教育を考えるために

関西学院大学 教授 みなもと おさお 南本 長穂



涓水会の会報に涓水会とは無関係な人物である恩師（新堀通也先生）のことに触れるのは、私がこれまでの人生をふり返ると、最も影響を受けたことによる。なお、私が徳島大学教育学部在籍時に指導を受けたのは池田秀男先生。私が大学卒業後、教育学教室に勤められた西根和雄先生と原田彰先生も、新堀先生に学んでいる。

新堀先生は大正10（1910）年神戸生まれ、広島大学教育学部、武庫川女子大学（兵庫県西宮市）で計60年間、大学教員として勤務された。その間、教育社会学という新しい学問分野をわが国に導入・発展させた（平成26年1月に『新堀通也著作集』（全7巻）、日本図書センター、から出版）。

私が大学院に入った時に、先生が提案されていた研究プロジェクトは「地域教育診断のモデルづくり」。先生のシカゴ大学への留学の成果の一部だと考えられるが、比較教育学の知見を参照し、47都道府県の教育を診断し、日本の教育地図を描こうとした。私はこの研究プロジェクトに参加することで、わが国の教育を数量的、社会的、歴史的に知ること、考えることを通して、教育を考えるための教育社会学的な研究の方法を身に付ける基礎が養われた。

その当時考えたことを基に、今日マスコミ等でよく取り上げられる学力調査を少し考えてみたい。

調査の公表の毎に関心を集める全国学力調査は、2007年に始まり、中学3年生と小学6年生を対象に、国語科と算数（数学）科で実施され、県別の平均正答率が公表されている。県別の順位で下位に位置する都道府県の知事や市町村長の中には、その順位に不満を持ち、学校や教師の努力不足が最大の原因であるかのように主張し、物議を醸す。学校たたき、教師バッシングで人気取りをしている。

2014年8月26日の朝日新聞の紙面で、4月の調査結果が報告され、「都道府県別の平均正答率では、秋田、福井、富山、石川といった県が上位を占め、これまでと大きな変化はなかった。」と指摘し、「多くの県がわずかな差の中におさまり、順位の意味は薄れつつあるといえそうだ。」と評している。確かにその通

りで、平均正答率で1位県と47位県との差は大きくない。しかし、総括はこれだけでは十分でないだろう。この学力調査の結果は何によってもたらされたかの諸条件の検討が都道府県別になされなければならない。例えば、都道府県別の財政に占める教育費の割合や児童生徒一人当たりの教育費と学力水準の関係性などの視点からの分析も必要である。

また、2014年10月15日の朝日新聞の誌上に2014年3月の都道府県別の大学進学率が報じられている。見出しは、「大学進学率地域差広がる」である。大学進学率の上位10県をみると、東京72.5%、京都65.4%、神奈川64.3%、兵庫61.7%、広島59.9%、奈良59.3%、埼玉58.7%、愛知58.1%、大阪58.1%、千葉57.4%。全国平均は53.9%。

ちなみに、学力調査で上位に位置する秋田42.1%（33位）、福井49.5%（24位）、富山50.0%（22位）、石川51.8%（16位）。この大学進学率の県別データと学力調査のそれを比較すると、結果は大きく異なる。学力調査の結果に都道府県の首長が一喜一憂し、結果を学校別に公表すべきだ等と騒ぎ立てるが、大学進学率には首長のコメントは全くない。

なぜ、学力調査の結果と大学進学率とに相関性がないのか。学力調査で最上位の常連県の秋田県の子どもが、なぜ大学進学率で全国平均よりかなり低い位置にあるのか等、疑問は当然生まれる。もちろん、大学進学率を向上させるために小・中学校の教育は行われているわけではないが、では学力調査の結果はどのような意味を持つものなのか、より広い視野からの検討が待たれる。

強調するまでもなく、こうした視野や問題把握の方法こそ、私が大学院入学時に学ぶことができたものである。新堀先生が当時提起した教育比較による、県別にみた地域の教育課題の検討であった。

なお、上記に関連する文献と、今年出版した著書をあげさせていただくことにします。

○南本長穂・押谷由夫「教育比較の社会学」、(新堀通也先生追悼集 刊行委員会編『新堀通也、その仕事』東信堂、平成27年)所収。

○南本長穂・山田浩之編『入門・子ども社会学』ミネルヴァ書房、平成27年。
(昭和47年 小学校課程教育学教室卒)

かけがえのない5年間

おおみや としえ
大宮 俊恵



教職科目担当の教員として5年前に徳島大学に赴任しました。この4月に2度目の定年退職（1度目は60歳で義務教育学校を退職）をして、今は長期に渡る教員生活の身辺整理をし、地域社会に順応するための期間として日々を過ごしています。

大学では、主に教職関連の科目を教えさせていただきました。専門の道德教育や教師論、生徒指導論、教職実践演習等です。学生さんは総合科学部だけではなく、医学部保健学科や栄養学科の人達も含め、ほとんどの授業が90名前後という大人数でした。しかし、受講態度はまじめで、楽しみながら授業ができたというのが実情です。また、研究室にも学生さんたちが再々訪ねて来てくれ、教師として必要な諸々の事柄や教員採用試験の対策など時間の許す限り話し合い、有意義な日々を送らせていただきました。中でも、研究室での会話はついつい話が広がり、学生さん一人一人の家庭の事情や友達関係、恋の悩みと、その中味は多岐に渡り、現代の学生事情というのを垣間見ました。時には学生相談室に行った方がいいよ、と内心思いながら学生さんが打ち明ける悩みを聞き、その整理をしたり、これまでの歩みの意味づけをしたりして長時間話し込んでしまいました。

特に、真剣に教師になりたいと思ってくる学生さんには、話の中で教師になるとはどういうことか、また、現実の教師の言動等、授業中に伝えきれなかったことをついつい話してしまうということになりました。何より一人の人間として生徒をどう見て、その子の将来をどのように見通し、どのような関わりをしていくべきかを常に考えることが問われているとか、将来に渡るその子の成長に寄与するならば、教師としてそれなりの自分を創り上げていく必要がある、とかを自分の経験を通してついつい語るが多かったです。

私は、「①どの子にもその子なりの善さがある。②どの子もよく生きたいと思っている。③しかしながら、成長の過程でそう生きられない現状にある子どももいる。④また、どの子の中にも弱さ、醜さ、

優しさ、思いやりの心等が混在している。⑤それが子どもであれ大人であれ人間である」という生徒観といますか、人間観をもっています。また、本大学の先覚である河原貞夫先生が引用されたトルストイの「人生論」の水車小屋の話をいつも念頭において指導観を語るが多かったです。その話の概略は、“代々腕前がよく、よい粉をひくので大変繁盛していた水車屋が、あるときふと水車の研究に凝ってしまって、粉ひきのことはそっちのけになって水車が狂って粉が悪くなってしまった。しかし、そんなことはおかまいなく研究に没頭していった”というものです。この話に続いて、河原先生は徳島大学教育学部附属小学校の研究紀要第一集の「序」の中で、「水車屋の研究の論理的過程は正しい。しかし研究の目的はよい粉をひくことである。研究の結果、粉が悪くなっては無意味である」とトルストイの言葉をさらに引用しています。私も教師は日々研究し研鑽を積むことは必要不可欠ですが、研究のための研究をするのではなく、それが多くの子どもの成長に帰するものでなければならぬと常々考えています。それで、話の中でこういう趣旨の内容が具体的についつい出てきてしまったものです。学生さんに私の心根が通じたかどうかは定かではありませんが、これも授業と同じく返ってくる真剣な眼差しを感受して、気持ちに通じているなど実感したことが度々ありました。

ともあれ、時間の流れは速く、あっという間の5年が終わりました。恵まれた有り難い月日を過ごさせていただいたことに対して、周りのすべての方々に深く感謝しています。中でも最終講義が終わった時、総合科学部、医学部の受講生一人一人の署名が裏に入った感謝状と抱えきれないほどの大きな花束をいただいて、最後の最後まで、幸せな教員生活を送らせていただきました。

最後になりましたが、徳島大学総合科学部や教えさせていただいたすべての学生さんの益々の発展を心からお祈りさせていただきます。

（昭和47年 小学校課程生物学教室卒）

若手研究者学長表彰制度による 学長表彰式が行われました

徳島大学では、若手研究者の研究能力の向上と、自立して研究できる環境整備の推進を目的として、優れた若手研究者を表彰し、研究支援金を授与する表彰制度を実施しています。9回目の平成26年度は、各学部等から17名の推薦があり、5名が表彰されました。このうちの一人として、渭水会会員の内海千種氏（大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授、臨床心理学）が選ばれました。内海氏は、事件や事故、災害に関連して生じる心理的变化をテーマにしています。これまで、阪神・淡路大震災による長期的な心理面への影響や、交通災害後に起こる心理的反応に影響する要因などについて調査研究するとともに、支援活動に参加してこられました。ここ数年でも、様々な災害や事件や事故が報道されています。今後も、被害をうけた方の心理的支援につながるような活動を期待しています。



平成26年11月27日（木） 徳島大学本部にて表彰式が行われました



受賞された若手研究者の先生方。前列左端が内海千種先生

総科のおたから

其ノ参

とくはこならず
徳不孤

下左方の紋は剣山と鳴門の渦潮をモチーフにした伝統ある徳島大学・学生章です。総合科学部キャンパスは助任川の川縁に位置しますが、この川は黄河に合流した渭川にちなみ古来より渭水と呼ばれています。総合科学部同窓会の名称はこの渭水に由来しています。そして、総合科学部玄関前に、この学生章の形を簡素化して、円形の上に三角形をあしらった黒色花崗岩の小さな彫刻があります。この彫刻は1994年、開学120周年を記念して、ひときわ目につく大きなステンレスの彫刻「調和と発展」と並置して河崎良行名誉教授により同時につくられました。その上面には「徳不孤」の揮毫が彫り込まれています。この碑銘は田中繁夫（双鶴）元渭水会々長の筆によるものであり、論語から抜粋したものです。氏はその来歴について次のように述べています。

子曰「徳不^レ孤、必有^レ鄰（徳孤ならず、必ず隣あり）」。すなわち徳を行っている限り、人は決して孤立するのではない。必ず共鳴者が現われる。と、言う意味で、徳こそ人倫の中心であり、教育の根源であり、中核であらねばならない。という意味と、合わせて「徳島」の徳を掛けて特に「徳」を選んだもので、「教育」・「徳島」・「渭水会」の相関に、ふさわしい語と判断して選んだものです。書体は、行草体を採りましたが、真心こめて一気に書き上げたものです。更に、高遠、悠久の意も含めようと思いました。（右の段は平成6年9月30日発行・渭水会々報第10号より引用）〔J〕



徳島大学の学生章



「徳不孤」が刻まれた彫刻。
後方は「調和と発展」。
どちらも河崎良行名誉教授の作



Let's sports! Vol.6

体や健康、スポーツに関する
話題をシリーズでお届けします。

日本拳法とは？

徳島大学総合科学部社会創生学科4年 拳法部元主将

わだ けいすけ
和田 慧介



みなさんこんにちは。私は昨年度、拳法部の主将を務めさせていただきました。

拳法部、という名前ではありますが、さて、みなさんは「拳法」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか？おそらく多くの方は「少林寺拳法」をイメージするのではないのでしょうか。実は我々の拳法は、その少林寺拳法とは全く違うもので、「日本拳法」と呼ばれるものです。勘違いしやすいので、「日本拳法部」と自称することもあります。「日本の拳法って空手じゃないの？」と思われるかもしれ

ませんので、簡単に説明いたします。

まず、格好が違います。空手も少林寺も道着に帯を締めた姿を想像するかと思います。日本拳法には以前は形が違った独自の道着があり着用したようですが、現在はほとんど同じ形の物を着用します。では何が違うのか、それは「防具」の存在です。イメージでいいますと剣道の面と胴がそれに近いかと思います。金属製の面金を被り、胴と股当てを装備し、ボクシングで見るようなグローブをつけて戦います。当然詳細な機能は違いますが、私は初心者の方に説明

するときは大体このように例えます。この防具の存在が、空手や少林寺拳法を含む多くの格闘技の中でも特徴なところではないかと思えます。練習に用いるところはあるかもしれませんが、装着した状態で試合を行うのは珍しいのではないのでしょうか。

この存在から日本拳法は「最も安全に強くなれる」格闘技であると、我々は考えています。自衛隊徒手格闘においても、日本拳法が採用され、訓練として取り入れられていました。現在は正式な日本拳法ではないようですが、防具を用いた訓練は続けられているようです。自衛隊の方はそれが仕事ですから、怪我なんてしたときには大変です。そこからも、「安全に強くなる」ための格闘技であると考えてよいと思っています。

我々も、防具を装着し、日々練習を行っています。防具があることでやはり怪我はしにくくなります。拳の骨は怪我すると中々治りません。また、完治しない状態で練習すれば指が曲がった状態から戻らなくなったり、大きく膨らんだままになったりしてしまいます。その傷を誇らしいと思う方もいるかもしれませんが、生活に支障が出るとよくありませ

んし、スポーツの持つ健康維持の考えに反してしまいます。また、「強くなる」ことにおいても怪我することは練習の妨げになりますから、極力避けるべきです。その観点から、我々の練習におけるモットーは「安全に強くなる」ことです。学生生活との両立は、やはり安全あってのものです。拳法のせいでペンが持てませんなんて言い訳はしたくありませんし、本末転倒です。

この記事のお話をいただいたきっかけでもあるのですが、一月二十日の大寒には、小松海岸で日の出とともに寒稽古も行いました。風邪もなく、元気に練習できることは、格闘技の実力につながるだけでなく、将来重要な経験になると考えています。

長々と説明させていただきましたが、以上が我々にとっての日本拳法です。怪我なく、心身共に鍛えることができる環境で、日々練習に励んでいます。

記事のほとんどが競技の説明になってしまったようで申し訳ありません。ですが是非この会報を読んで下さった方には今後とも、活動を続けていけるよう、応援していただきますようよろしくお願い申し上げます。



普段はジャージに防具で練習しています

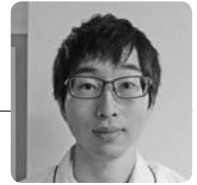
スタートライン

S T A R T L I N E

徳島大学大学院生としての「今」

徳島大学大学院 総合科学教育部 地域科学専攻 環境共生分野

つづき ひろみつ
都築 弘充



私は、平成27年3月に、徳島大学総合科学部社会創生学科環境共生コースを卒業しました。現在は徳島大学大学院の博士前期課程1年生として、徳島大学に在籍しています。進学先がこれまでと同じ大学の大学院であるので、自分を取り巻く環境に大きな変化はありませんでした。しかし、日々を過ごす心構えのような、日常に対する考え方は、大きく変化しました。学部生1、2年の間は、ただ大学院に進学し、研究をしたいと考えていました。どの大学院に、何の為に進学するのかを問い直し、自分の進路をはっきりと定めたのは学部生3年になってからでした。早いうちから大学院進学を志していた為、正直なところ、この4年間で過ぎてても学生生活は終わらないという、あまり良くない意味での「余裕」があったと思います。今思い返すと、もったいない時間の使い方をしていました。学部を卒業し、大学院に進学する頃には、周りの友人の多くが就職してきました。久々に再会する友人の殆どが、新たな社会人としての生活の話をしていました。私は博士前期過程を修了したら、就職したいと考えていたので、私に学生として、大学院生として残された時間は2年しかありませんでした。友人の話を読み返したり、自分の今後を考えたりしていると、これからは、今までのような気分では、いられないという気持ちになりました。学生としての一日一日を、もっと大事にしたいと思いました。

現在、私は、特用林産物であるキノコの研究をしています。近所のスーパーに行ってみると、椎茸やエリンギ、えのき等の様々な商品を手に取り、購入することができます。しかし、秋の味覚として名高い松茸は、そうはいきません。国内産松茸は非常に

高値で取引され、旬にならないとなかなか入手できません。海外から輸入された松茸は比較的安価に購入できますが、それでも他のキノコと比べて高価です。その原因の一つは、松茸は人工栽培ができないということです。キノコの人工栽培とは、様々な方法を用いて、人の手でキノコを生産することです。椎茸やえのきといった、スーパーでよく見かけるキノコは木材腐朽菌と呼ばれる、木を分解して生きるキノコです。これらのキノコは人工栽培の方法が確立されている為、安定してキノコを生産することができます。しかし、松茸はどのようにしてキノコが作られるのかが、科学的に解明されていない為、人工栽培をすることができません。私は、このような不思議なキノコである松茸の謎を少しでも解明したいと思い、現在、松茸のキノコの作られ方に関する研究を行っています。難しいテーマであるので、なかなかうまくはいきませんが、根気よく研究を続けたいと思います。博士前期課程を修了したら、自分の専門性を活かすことのできる職業に就きたいと考えています。その為にも、大学院生としての今の日々を大切に、努力していきたいと思います。

このようにして、4月から、大学院生としての生活がスタートしました。大学院生としての日々は想像よりも忙しく、思うようにいかないこともありますが、徳島大学大学院生としての「今」を大切に、日々努力しています。学部生の時と比べ、自分の周囲の環境はあまり変わりませんが、絶対に後で後悔しないように、残された学生としての日々を過ごすという決意のもとに、今、大学院生としての新たなスタートラインを切ったところです。

(平成27年 社会創生学科環境共生コース卒)

今思うこと

みうら
三浦 ゆかり

私は平成26年3月まで徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻環境共生分野に在籍しており、化学、主に有機化学の勉強をしてきました。徳島で過ごした6年間の学生生活を改めて振り返ってみると、友達と毎日会って刺激しあい、やりたいことに挑戦し、自分の知見が広がった学部4年間と、日々研究に没頭しつつも、自分の本当にしたいことは何なのか、これでいいのか、これからどうしていきたいのか、自問自答を繰り返した大学院2年間だったと感じています。

私は現在、食品会社にて新規プロジェクト立ち上げのための基礎研究に携わっており、化学物質の生体に対する影響を調査する仕事をしています。業務の中には学生時代でも使用していた分析機器を操作することもあります。動物からの採血や解剖などこれまで経験のないことも多く、日々勉強の毎日を送っています。

私が就職活動をする上で最もこだわったのは、「食品に関わる研究に携わりたい」ということでした。そして、このような思いを抱いていた私にとって、現在の仕事はとてもやりがいのある仕事であると感じています。現在の仕事ができているのは、縁があったからという面ももちろんあると思います。しかし、研究室での経験から、自分の得た研究結果が新たな発見に繋がり、そこからまた新たな可能性が広がるという、研究の楽しさや面白さ、やりがいを感じる事ができ、そこから芽生えた研究にこだわる気持ちが大きかったと思います。

本稿の冒頭に、自問自答を繰り返した大学院2年間だったと書きました。大学院生になった時、社会人となった友達から、仕事での新しい経験の話を聞く機会が増えました。友達から聞く話はとても刺激

的であったのと同時に、学部4年生のときと同じ研究室に所属していた私にとって、環境の変化のない自分に対し不安や焦りを覚えるきっかけとなりました。私が大学院に進学した理由は、研究を続けたいと思ったからではありますが、それは研究にこだわりがあったからではなく、なんとなくという感じが強かったように思います。なので、友達から話を聞くことで、どうして自分はまだ同じ環境にいるのだろうかと考えることが多くなりました。そんなことを考えつつ、今はやるべき研究に必死に取り組もうと自分に言い聞かせていました。しかし、研究を進める過程で少しずつ自分の研究テーマへの興味が高まっていき、興味が高まることでもっと多くの知識を得たくなり、知識が増えることで、研究テーマに対するこだわりが強くなっていきました。そして、こだわりを持たせたことで、「食品に関わる研究に携わりたい」という夢を明確に持つことができました。

将来に対する不安や焦りを感じることは、これからもたくさんあると思います。その時に、自分の中で何かひとつでもこだわりを持っていることがあれば、それを軸に一步前へ踏み出せると思います。なので、「こだわりを持つ」ということを忘れず、これからも精進していきたいと思っています。そして在学中のみなさんが、今勉強していることに興味を持っていたり、他に興味を持っていることがあるなら、その興味にこだわりを持って学生生活を送ってほしいと思います。

最後になりますが、この度、本会報誌に寄稿できる機会をいただきましたことに感謝いたします。

(平成25年 総合理数学科物質総合コース卒)
(平成27年 総合科学教育部地域科学専攻環境共生分野修了)



新たなスタートライン

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻博士前期課程1年 たてだ さわ 立田 彩和

この度は徳島大学涓水会々報に寄稿できる機会をいただき、ありがとうございます。私は平成27年3月に徳島大学総合科学部を卒業し、現在、同大学院博士前期課程に在籍しています。卒業後就職して社会人となった友人たちと違い、学部の時と研究室も同じため特に生活に変化はないと思っていました。しかし、学部生から大学院生への変化は私にとって意外に大きなものでした。

一番変わったと感じたのは研究に対する意識です。私は有機合成化学を専門とする研究室に所属しているため、研究には実験が必須です。4年生の頃は、自分の研究なのに目的や意図が解っていなかったことがあり、教授の指示に沿って先輩に教えてもらいながらでないと実験を進めることが困難でした。しかし後輩が配属されてからは自分が教える立場になり、作業になりつつあった実験を意識して考えるようになりました。

今年度からは修士論文に向けた研究が始まりました。テーマが卒業研究で用いた反応試薬を使った新規有機合成手法の開発なので、これまでの研究内容をふまえた実験を行っています。4年生のときは行き詰ったとき、すぐに教授や先生方に指示を仰いでいましたが、自分の経験に基づき改善できる点はないか、まず考えるようになりました。すぐに助言を求めると倍ぐらいの課題や指摘が返ってくるため、多少反発していたこともありましたが、自分で立てた仮説に基づいて実験を行ってみて思った通りの反応が進行したときなど、とてもやりがいを感じま

す。今では先生の指摘に納得して、自分の勉強不足と成長を感じています。また、新年度から新しい助言教員も加わり、今までにない視点から実験のアドバイスをいただくこともあります。院生になって有機化学の理論や反応について深く学ぶ機会が増えたことも、研究に対する意識の変化に繋がっていると思います。

院生としての生活は忙しいですが、とても充実しています。自分の研究や研究室での勉強会の合間に、大学院の講義や初めて経験する実験のTA（ティーチングアシスタント）などがあり、慣れるまで大変でした。特にTAは、私が学部生だった頃にお世話になったため、同じようにサポートできているのか不安になることもあります。しかし、自分で実験しているだけではわからない、教わる立場からの視点や質問を受けるということはより深く内容を理解する勉強になり、とても有意義なものです。

院生という新しいスタートラインに立ってみて、自分が恵まれた環境にいるのだと実感しています。お互いに研究の話ができる仲の良い友人や、就職活動などの相談に乗ってくださる先輩方、いつも場を明るくしてくれる後輩たちに囲まれ、厳しくもユーモアに溢れた先生方に御指導をいただいています。私の人生においてこの2年間は短いですが、貴重な経験と知識を得られる機会です。徳島大学院を修了した者として社会に出る際に悔いが残らないように、残りの学生生活を過ごしていきたいと思っています。

(平成27年 総合理数学科物質総合コース卒)





|エ|ッ|セ|イ|

タイ王国からの留学生と阿波踊り

室蘭工業大学しくみ情報系領域 准教授 須藤 秀 紹

昨年の春、私たちの研究室はタイ王国からの2名の留学生を迎えていました。彼女たちはランナー王国の古都チェンマイにある大学の出身です。仕事で何度か彼女たちの出身大学を訪問した際、有名なドイステープ寺院や旧市街など、チェンマイのさまざまな観光地を案内してもらいました。そのお礼に、日本のどこかに連れて行ってあげたいと考えたとき、思いついたのが「阿波踊り」でした。

私が中学校2年生から約16年間暮らした徳島を離れたのは、徳島大学を卒業後7年勤めた徳島市内の会社を退職し、大学院で学ぶために大阪に引っ越したときのことです。今では、徳島で過ごした時間よりも長い18年が経過しました。その間、大阪、秋田、北海道と3つの場所で暮らし、それぞれの地域で思い出深い体験をしてきました。それでも学生時代によく通った美味いうどん屋のことや、ゼミ旅行で訪れた県南の美しい海のことなどは特別な記憶として思い出されます。当然、阿波踊りも特別な思い出で、同僚や学生に話すことはありましたが「この時期は人が多い」という印象が強く、その後訪れることは有りませんでした。ちょうど良い機会なので、彼女たちと一緒に試してみようことにしました。

札幌から徳島には、夏の間だけ飛行機の直行便が就航しています。早速、そのチケットを、学生2名分と私たち夫婦の分、計4枚を購入しました。せっかくの阿波踊りなので、2人にも「踊る阿呆」になって、本当の楽しさを体験して欲しいところです。



留学生たちと一緒に

私の勤めている大学は、教員数200人程度の小さな単科大学ですが、どういうわけか徳島に縁のある方が多く勤めています。その一人



コタキナバルにて

に、このアイデアを相談したところ、その方が紹介してくれた徳島市の関係者の方が、市役所が募っている連に応募することを勧めてくれました。とても人気があり競争率の高い企画であることを後から知りましたが、幸運にも、4名とも踊り子として受け入れて貰えることになりました。

徳島市に到着したのは、阿波踊り初日の8月12日夕刻。すでに駅前にはよしこのリズムが響き、連の皆さんが踊りに向かうため移動していました。留学生たちも祭りの雰囲気に興味津々な様子です。徳島駅前付近で少し踊りを見学してから、「ホームステイ」する妻の実家がある阿南市に移動しました。

踊りの当日は、まず市役所に集合し、スタッフの助けを借りながら、それぞれの衣装に着替えました。タイ人の学生たちも、なかなか様になっています。市役所前の広場で少し踊りの指導を受けたあと、たくさんの観光客や、他の連の方達を縫うようにして、市役所近くの演舞場入り口に移動しました。そこでは、すでに二つの連が順番を待っていて、私たちの連もその後ろに並びました。連を紹介するアナウンスが響き、先行する連が呼び出されるごとに演舞場の入り口が近づいてきます。留学生の2人も少し緊張しているようです。

先に順番待ちをしていた連が全て演舞場に消え、目の前にライトアップされた踊りの光景が広がりました。やがて自分たちの連を紹介するアナウンスが聞こえ、いよいよ棧敷席のある演舞場に踊り込みました。演舞場を照らすライトや棧敷席を埋める観客に圧倒されそうになります。学生時代には何とも思わなかったことが不思議に感じられます。

留学生の2人、さすがに初めは踊りが「様になっている」とは言えませんでした。それでも見よう見まねで踊っているうちにしだいに周りにとけ込んできて、観られるようになってきました。2つの演舞場で踊り、普段の運動不足から、終盤には手も足もかなりきつくなってきました。彼女たちも、手や足が上がらなくなってきているようです。若くてもキツイのですね。それでもみんな笑顔です。栈敷席からの応援に励まされながらなんとか最後まで踊り切ることができました。

あつと言う間の体験でしたが、このときのことを思い出すと、美しい踊りが街を埋め尽くす幻想的な風景が心に甦ります。タイ人の2人も、ことあるごとに「楽しかった」と思い出を語ってくれています。考えてみれば、学生時代は夏ごとにこの光景を目にし、踊りの列に連なっていました。幸運なことだったと改めて実感しています。

(平成3年 総合科学科基礎科学コース・ピークI
数理・システム科学研究卒)



踊りもさまになってきました



|エ|ッ|セ|イ|

一生チャレンジ

くわ はら さち こ (旧姓 大谷)
桑 原 幸 子

「面白かったよ」「また来ちえね」ブラックライトシアター「スイミー」に感動した幼児たちのあどけない目や声に「お蔭さまで」と感謝の念が一杯の今日この頃です。



手作り人形劇「ジャックと豆の木」の出前公演

幼稚園教員定年退職後12年、300回以上の出前公演や工作講座のボランティア活動をしてきました。

「幼児たちにお話を語りたい。そうだ徳大に行って幼稚園の教員になろう」と昭和37年に入学。迷わず児童文化研究部の門をたたいたことが、私の現役そして退職後の活動の原点となっています。桜吹雪の下での「児研青空コーラス」の歌声は青春時代の大切な思い出でもあります。

夏休みには人形劇の舞台装置や人形などの荷物を肩にかけ、路線バスで県内の僻地に赴きゲームや人形劇の公演をします。私のチームは勝浦郡の坂本小学校から、旭小学校まで1日1校5日間の巡業公演でした。当時は山間地域にも子供が一杯いて、生き生きと輝いていました。

38年間勤めた幼稚園教員は私に最適な職業でした。「語り部になろう」と毎日の保育にお話や絵本

の読み聞かせを取り入れ、幼児たちと共に物語に浸り喜びを共有しました。そしてそれは、教員としての至福の時であり、小さな誇りになっています。

退職後、「子供たちに劇を」という願いにちょうどタイミングよく徳島市ふれあい健康館の館長から、ボランティア活動参加への示唆があり、サークル「友達いいな」のネーミングで登録したことが劇づくりへの第1歩でした。

教員仲間のMさんと「できるだけ良いものを」と「白雪姫」の大作にチャレンジしたものの、あるのは「声」のみ。何にもないゼロからのスタートでした。「何とかなるさ。楽しいのが一番」と毎日走り回りました。

舞台の背景となる大きな森は友達の描画クラブのメンバーが何日もかかって描いてくれました。花のアーチは85歳の谷さんが重厚な油絵で、装飾業の方からクロス紙の提供、固まった絵の具は何日も温めるなど苦しかったけれど、毎日が充実していました。

たくさんの衣装は新しく友人となった方にお任せ、大阪でバレリーナをしている姪に姫の役を。台本と音楽は私。しかし、白雪姫のすべてのキャストを集めるのは大変でした。

ある日の体操講座で、目の前で体操している男性を見つけ、「あ。王様だ」すぐお願いすると「えー王様ですか？家来なら」と目を丸くしながら引き受けてくれるなど、多くの方が参加してくれました。

劇は総合芸術です。沢山の協力と頑張りのおかげ



「白雪姫」(於 徳島市ふれあい健康館)

で、当日は子供たちの食い入るような目と拍手に、私たちは大きな達成感と満足感を味わったものです。

「私の手作りの人形をどうぞ」素晴らしい人形の提供で多くの人形劇を作ることも出来ました。

会員は、絵が得意、演劇好き、音楽好き、英語ができる、裁縫ができるなど特性のある常時会員が8人、要請に応じて協力してくれる人が数人で構成されています。

仲間は一週間に一度集まり、初演に夢を馳せながら、自分の好きなことを生かしてどんどん劇を作っています。

ボランティアサークル「友達いいな」は、徳島市子育て応援団として、児童館や幼稚園、保育所などに前出事業をしています。ふれあい健康館のホールは勿論、アスティとくしま・ときわホール、あわぎんホール、あすたむらんどにも出演できました。

劇と並行して、「器用な指と創造性を養いたい」の合言葉で工作講座を始めて8年になります。自然物を中心にした自由でオリジナル工作は私達の予想以上に好評です。子供たちの物づくりに集中した顔が素晴らしい。「ありがとうございました」と作品を手に深々とおじぎをして帰ってくれます。

更に今、高齢化社会に適用すべく、アンチエイジング講座に取り組み、広めていこうと努力しています。

「友達いいな」の活動を通じてたくさんの友達ができました。人々との出会いがまた新たな原動力になっていると感じます。

多くの方々に感謝している次第です。

(昭和39年 学芸学部2年制小学校保育兼修課程修了)



子供たちも舞台上立ってお花になって歌います



草創期の恩師を偲んで

やま だ ひで お
山 田 秀 雄

昭和28年3月20日、第1回卒業式が工学部講堂で挙行され、4年制に限って言えば、中学校課程59名、小学校課程42名に晴れて卒業証書が高森時雄学長から授与された。教育学士などという称号は眩しいばかりで、如何なるものか、何の効用があるのか、まず無関心であった。

答辞を聞き乍ら入学以来4年間の様々な思い出が心の中を去來した。その1つは宝籤たからくじ、そして教育実習。

昭和25年の行事として忘れ難いのは、大学復興資金募集と称して生徒1人当たり125枚の宝籤販売を割当てられたことだった。当時としてはさして安くもない籤券などそうそうに売れる筈もなく、宣伝の幟を担ぎ、リアカーにオルガンを載せて女子が弾き、男共が歌いながら寒風の中を元町や新町を流して歩くという珍道中。今思っても涙が出る程の真面目な取組みだった。それでも余った券は知人や親戚に頼み込んだり、最後には自分の小遣いをはたいてノルマを果たす始末だった。

昭和26年、3年の僕たちは附属中学の先生方御指導のもと、学級別教科別に配置されて実習の教壇に立った。

10月から11月にかけての30日間は地獄だった。時間毎の指導案と反省文、頼りない授業に赤恥をかき、可愛い生徒に笑われ、指導教官に叱られ乍らも何とか実習を済ませたことは生涯の思い出となった。そして恩師の先生方とあの可憐な生徒たちとの交流も決して忘れない。

地理学教室で、地質学の中川衷三先生、人文地理学の岸本実先生は共に徳島を代表するこの道の権威であって、中央構造線がらみの何らかの問題が提起されると、新聞にはその度毎にお二人の顔写真入りで論評や解説記事が掲載され、その度に僕は誇らしく思った。

岸本先生は後に立正大学に教授として招かれ、徳島県の凡ゆる情報について一手に引き受けられ全国に向けて発信されていた。中川、岸本両先生は偉す

ぎて怖いという印象に対して、お若い土井仙吉先生は大変気さくな方で、例えばプリントを配るのにも生徒任せにせず1枚ずつ、質問には説明付きで手渡され、失礼な奴が遠くから「先生、わしにも！」と言うと、やはり自ら持って行かれて「どうぞ！」と手渡される。側で見ている、何と丁寧な先生だろうと思った。

その土井仙吉先生は、岡部達先生と、附属中学の寺戸恒夫先生も共に四国や徳島の地質や地形、そして産業等について調査され大きな業績を残されている。

生物学教室の岡田克弘先生は東北大学から來られた発生学の大家で、僕たちはウニの発生や生物の進化について教えて頂いたが、レポート提出の際には「ドグマに陥るな」との御注意をいつも頂いた。

桜井凶南男先生は医学部の精神科の教授であられた方で、放射線、脳波、心電図などについて教えて頂いた。

化学教室の中村輝孝先生、三島長太郎先生にはマッチの擦り方に始まって各種の実験実習をさせて頂いた。私たちが今専門外の定性・定量分析の言葉に出会っても一応たじろがずにいられるのもこの頃の一般教育のお蔭であると思っている。

数学の田村孝行先生は県下の数学者たちによる研究会を作り、幟町の御自宅を拠点として御自ら精力的に活動され研究誌を発刊されていた。主として抽象代数学であったが、数式ばかりの原稿を集め、編集し、校正されるのはさぞ大変だったであろう。正誤表まで配られる程の誠実さであった。

一般教育の中でも数学は最も難しい教科で、苦手とする学生は多かった。微積分学も微分方程式ほどに高度になると皆赤点だけは免れようと必死だった。その事を察して下さったのか、田村先生は成績の算出に独特の手法を講じられた。それは、単なる相加平均でなく、分数式を含む三元の代数式に本人の成績を代入するという複雑なもので、不得意な者が不当に不利とならないような配慮をして下さったものと思われる。

カリフォルニア大学の招聘を受けられて、昭和35年、君江夫人と中学2年の令嬢を伴われて渡来された。内助の功宜しきを得て先生の令名は益々高く、世界数学会議には大学の代表若しくは米国学会の代表として欧州やロシアのモスクワなどに夫人を伴われて出席された。先生は小柄でお顔も小さいというので、黒く長い髭を大きく蓄えられ、以て堂々の貫禄を示されていた。

令嬢と言えば田村先生の他に粟津先生、桜井先生、富本先生にもそれぞれ目に入れても痛くないような可憐な娘さんがおられたのも印象的であった。因に粟津先生の令嬢は倫子（ともこ）ちゃん。いかにも先生らしい御命名であった。

ここで思い出す同窓仲間の足跡について些か知る限りを述べておきたい。

遙か東京の大学に在って海野十三研究など評論隨筆を以て活躍されている小林芳仁君には、「外国人のための日本古典案内」などの業績がある事を知る人は尠いであろう。玉井孝君はNHK徳島放送局を経て神戸放送でのアナウンサーとしての長い経歴は斯界の大先輩として尊敬を集めている。放送局といえば村崎孝彦君は四国放送設立の功労者で、徳島青少年少女合唱団の生みの親でもあった。

一宮俊一君、遠藤忠夫君の障害児教育への貢献は言うに及ばず、谷典博君の、失われた旧・古地名の発掘と検証、井内孝幸君の見事な阿波木偶人形の作品と制作技術、小泉周臣君の郷土経済史研究、宇田晃君の英文語法研究、曾川和郎君のサンショウウオ

科の同定と保護、三宅英雄君の徳島市史編纂、富永敏衛君の優れた短歌作品、中山茂貴君の児童教育論など、その他知られざる研究、功績はもっとあるに違いない。ともすれば忘れられがちなこれら業績は、たとえ未完のものであっても、各人が本務の傍ら成し遂げられた貴重なものなので、一覧し検索できるような場が欲しいものである。これは先駆者たちへのオマージュであり、又それが私たちの義務でもあろうかと思うのである。

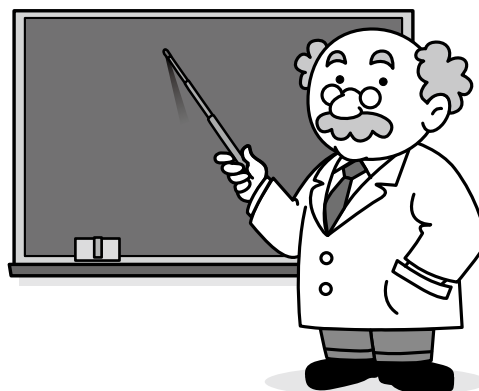
そして何よりも、草創期の恩師の方々の業績をも末永く追懐し記念するためにも是非併せて収集して頂きたいものである。

私たちは偶々この世に生を享け、この大学に学び、多くの先生方に育てて頂いた。行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。顧みれば、数々の恩師の思い出は尽きることがない。しかし命の終わりはもうすぐそこに見えている。その時が来たなら、薄れゆく意識の中でもなお、師の面影を偲びつつ感謝の心を以て瞑目したいものと思っている。

(昭和28年 中学校課程音楽教室卒)

【お詫びと訂正】

第43号P33、山田秀雄様の原稿の中で「蓮池先生」とありましたのは、すべて「蒲池(かまち)先生」の誤りでした。ご訂正申し上げますと共に、深くお詫び申し上げます。



高校・特別支援学校総会並びに講演会

部会長 井 上 薫

平成27年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成27年8月22日（土）に、ホテルグランドパレス徳島にて、涓水会本部から石井博会長様をはじめ、秋山賢治副会長様、毛利久康理事長様、大井美弥子事務局長様、総合科学部から平井松午学部長様のご臨席を賜るとともに、顧問の方々、高校・特別支援学校会員の皆様のご出席のもと盛大に開催をしました。

総会では、平成26年度の会務報告・決算報告の後、平成27年度の役員選出、会務計画・予算案についての審議を行いました。会務報告・決算報告・会務計画・予算案については、事務局提案のとおり承認されました。

平成27年度の役員については、現職の校長が副会長に、現職の副校長・教頭が監事に、退職された校長先生方を顧問に就任していただくことで了承されました。また、今回の総会において次期部会長として、鴨島支援学校の林博子校長先生を選出し、林校長先生からご快諾いただきました。その後、出席者全員で写真撮影し、和やかな雰囲気の中で総会を閉じました。



講演会では、徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の久田旭彦先生を講師にお招きし、「知恵のものさしと心のコンパス」～メートル法にみる科学と社会のつきあい方～をテーマに、ご講演をいただきました。

久田先生のご専門は物理学ですが、徳島大学の前任は日本科学未来館で科学コミュニケーターをなされていました。本講演会では、科学コミュニケーターの経験から講義型の講演ではなく、最近文部科学省の方で新学習指導要領改訂のキーワードとなっている“アクティブ・ラーニング”の手法によるワークショップ形式でのご講演をしていただきました。

特に、単位については国によって異なるものがあり、全ての人にとって公平な単位を作る必要から国

際単位系が用いられるようになったそうです。その国際単位系では、長さの単位としてメートル（m）、重さの単位が（kg）、時間の単位は秒（s）が用いられ、詳細に定義されているそうです。

講演では、“伝えること”の正確さについてのワークショップや、単位をめぐる様々な問題から長さや重さの単位を決めることの意義とともに、学生のレポートや火星探査機の事故から単位の決定には「対話による相互理解」、つまり科学と社会とのつきあい方が重要であることを教えていただきました。

総会・講演会・懇親会

日 時 平成27年8月22日（土）

場 所 ホテル グランドパレス徳島

講演会 講師：久田 旭彦 氏

（徳島大学 大学院 ソシオ・アーツ・
アンド・サイエンス研究部 講師）

演題：「知恵のものさしと心のコンパス」
～メートル法にみる科学と社会
のつきあい方～

事務局 徳島市立高等学校



講師：久田 旭彦 先生

（昭和54年 中学校課程卒）

渭水会教育課題研究会

竹 内 照 記

教育課題研究会は、現代の教育現場のさまざまな課題を幅広く取り上げ、各種の講演会や研究会に参加し、その内容について感想や意見を述べあい、教師力の向上を目指す研究グループです。

今回は、平成27年7月27日（月）に行われた防災教育の講演会をテーマに話し合いました。

当日の講師は、文部科学省教科書調査官の三橋浩志先生で、演題は、「子どもたちのいのちを守るためにー防災教育を中心にー」

とありましたが、防災にとどまらず、現在の日本の教育の課題について、さまざまな角度から、お話をいただきました。

講演内容の骨子は、次の通りです。

- (1) 防災教育を実践するにあたって心がけること
- (2) 「学校安全教育」における「防災教育」の位置づけ
- (3) 学習指導要領記述からみた「防災教育」の位置づけ
- (4) 社会科教育における「防災教育」の位置づけ
- (5) 子どもの貧困格差の広がり
- (6) 子どもを貧困格差から守るためには
- (7) 世界と日本の教師力を比較する
- (8) まとめ

日本の教育界は、小中高の教員、約100万人が



日々の授業実践を行っている。次世代の人材を育てる為には、これらの充実がすべてである。国際調査でも日本の先生方が優秀だということは証明されている。あらゆる場面を想定した上で、しっかりした指導を実践することが必要になってくる等、熱く語られました。

講演会後の情報交換では、会員から、次のような意見が出されました。

- 教育を実践していく上で、三橋先生のように文部科学省（中央）の話を聞くことは、自分たちの教育の方向性の整理につながると思った。
- 東日本大震災のあと、関心が高まった防災意識もやや薄まりつつある中、徳島市のマップの中に想定を当てはめながらの説明は大変リアリティがあり、わかりやすかった。
- ハザードマップについてのお話の中で、「ハザードマップをそのまま信じるな」というお言葉があった。マップは、日頃から注意しておくのだが、鵜呑みにするのではなく、情報を収集して分析することや、自分で判断することも大切だと思った。

教育課題研究会では、今後も、しっかりと会員の資質向上を図っていきたい。

（昭和62年 養護学校課程卒）



総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 (TEL: 088-656-7103 FAX: 088-656-7298)

(E-mail: sksoumk@tokushima-u.ac.jp)

【総合科学部の1年】

平成26年(2014)8月~27年(2015)8月

※平成26年8月25日(月)~29日(金)

上勝インターユニ・フィールドワークの実施

総合科学部が参加する地域系大学・学部連携協議会との共催の下に、昨年度に引き続き大学間連携事業として上勝町インターユニ・フィールドワークを実施し、鳥取大学・岐阜大学・北海道教育大学函館校の教員4名、学生5名、総合科学部の教員6名、学生20名が参加しました。本年度も町おこしの先進地である上勝町において「集落再生と持続可能な地域づくり」をテーマに合宿授業を行い、地域への理解を深めるとともに、地域課題解決に向けての実践的授業の一環として実施されました。参加した教職員・学生からは高い評価を受け、報告書も刊行されています。

※平成26年9月30日(火) 卒業式および修了式の挙

※平成26年10月2日(木)・3日(金) 国立大学法人17大学人文系学部長会議への参加(三重県)

※平成26年10月23日(木) 学部創立140周年記念モニュメント贈呈式の挙

学芸学部卒業生で二紀会会員の鎌田邦宏氏作「水の調べ」が、総合科学部創立140周年記念のモニュメントとして渭水会より寄贈され、除幕式が挙行されました。

※平成26年10月24日(金) 徳島県知事講演会の開催

飯泉嘉門知事による特別講演会が、総合科学部2号館の常三島けやきホールで開催されました。「『課題解決先進県・徳島』の挑戦を加速」と題して、徳島から「地方創生」への挑戦や南海トラフ巨大地震対策をはじめとする「安全安心・実感とくしま」の実現に向けた取組、本学と連携した地域活性化の取組などについてご講演いただきました。

※平成26年10月31日(金) 学部長と学部学生との懇談会を開催

※平成26年11月27日(木) 徳島大学若手研究者学長賞表彰式の挙

徳島大学若手研究者学長賞表彰者に渭水会会員でもある内海千種准教授(臨床心理学)が選出され、徳大本部で表彰式が挙行されました。

※平成27年1月22日(木) 康楽賞贈与式の挙

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、長井記念ホール(蔵本キャンパス)で挙行されました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

(教員の部)

境 泉洋 准教授「ひきこもり等の若者自立支援における認知行動療法の効果」

横井川久巳男 教授「食品微生物の機能制御に関する研究」

(学生の部 学術)

大学院総合科学教育部 2年次 三浦ゆかり

総合科学部 4年次 大谷 華、大西真央、野村佳季美

(学生の部 奨学金)

大学院総合科学教育部 2年次 福永衣留

総合科学部 4年次 高橋麻純、山田梨加、立田彩和

※平成27年2月24日(火) キャリア教育報告会ならびにFDワークショップを開催

教職員研修の一環として、ベネッセコーポレーション大学事業部の藤井公雄氏、東邦大学理学部の千葉康樹教授、本学の総合教育センター・キャリア支援部門の山野明美特任講師を招いて、キャリア教育のあり方についてのFDを開催しました。

※平成27年2月26日(木) 教育部長と大学院学生との懇談会を開催

※平成27年3月5日(木) 広島被爆二世アオギリ植樹式を開催

本学部の饗場和彦教授、葭森健介教授らが発起人となって、平和教育のシンボルとなる広島被爆二世アオギリの植樹式を開催しました。アオギリは総合科学部1号館前庭に植樹され、地元新聞・全国紙地方版などでも紹介されました。また、3月21日(土)には関連して、映画「アオギリにたくして」上映会も2号館常三島けやきホールで開催されました。

※平成27年3月7日(金) 福島支援活動紹介の特別展を開催

総合科学部の中山信太郎教授(放射線学)が中心となって進めている徳島大学による福島支援活動を紹介した第12回特別展「徳島大学 福島支援プロジェクト『ふくしまとくしま ともに歩もう』」が、徳島大学本部(新蔵地区)の日亜会館1Fのギャラリー新蔵で3月2日~平成27年4月30日に開催されました。

※平成27年3月23日(月) 平成26年度卒業式・修了式、優秀学生表彰の挙

アスティとくしまで午前10時より挙行されました。午後には総合科学部において優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時30分よりパークウェストンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は248名、大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻27名、臨床心理学専攻9名、博士後期課程地域科学専攻が1名。優秀学生表彰者の4年生は次の通りです。

(人間文化学科)

谷先直子、小西沙季、上原郁美、原口侑大、片山 葉

(社会創生学科)

濱野佳菜、都築弘充、高木美和、圓滿加奈、山岡菜由子

(総合理数学科)

山田梨加、木村優斗、齋藤あゆみ

※平成27年3月23日(月) 渭水会会長賞の授与

→関連記事 P8

卒業式当日、12時40分より総合科学部第2会議室で、渭水会の石井 博会長より、第1回の渭水会会長賞として表彰状と賞金が受賞者に渡されました。

受賞者は次の方々です。

〔総合理数学科 数理科学コース〕山田梨加
〔人間文化学科 心理・健康コース〕大野佑花
〔社会創生学科 地域創生コース〕坂東玲子

＊平成27年4月6日(月) 平成27年度入学式の挙

午前10時より、アスティとくしまで平成27年度徳島大学入学式が挙

＊平成27年5月18日(月) 文部科学省事務次官の来学

文部科学省事務次官の山中伸一事務次官が徳島大学を視察されました。総合科学部の取組として、附属図書館HPにアップした「伊能図学習システム」について塚本章宏准教授、3Dプリンターを活用した「津波浸水深度の仮想体験装置」について河原崎貴光准教授から紹介されました。

＊平成27年5月18日(月) 城戸久枝氏講演会の開催

総合科学部卒業生で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞された城戸久枝氏による講演会「戦後70年、あの戦争の記憶をどう伝えるのかー戦争を知らない世代に求められるものー」が開催されました。

＊平成27年5月22日(金) 大学院入試説明会の開催

＊平成27年5月28日(木) 育達科技大学(台湾)と学術交流協定を締結

台湾・育達科技大学人文社会学院との学術交流協定(部局間協定)の調印式が育達科技大学で行われ、平井学部長と村上敬一准教授が参加しました。調印式には、育達科技大学からは陳建勝校長(学長)、人文社会学院の藍培青副院長をはじめ、応用日本語学科に関わる多数の教職員の方々にご出席をいただきました。

＊平成27年5月30日(土) モラエス資料展示室のオープン →関連記事 P6

＊平成27年5月30日(土) 渭水会総会の開催 →関連記事 P36

＊平成27年6月25日(木) 地域系大学・学部連携協議会に参加(山形県)

＊平成27年7月23日(木) 平成27年度総合科学優秀賞受賞者表彰式の挙

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部において優れた研究成果を発表した教員に対して贈られる総合科学優秀賞に山本裕史准教授が選出され、表彰式が行われました。

＊平成27年8月2日(日) 総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催

＊平成27年8月10日(月) オープンキャンパスの開催

新・総合科学部(社会総合科学科)のオープンキャンパスが開催されました。参加者数(延べ数)は、高校生615名、保護者182名。

＊平成27年8月28日(金) 総合科学部改組の承認

徳島大学が申請していました新学部の設置(生物資源産業学部・理工学部)および総合科学部の改組(3学科を社会総合科学科に再編)が文科省で承認されました。

【人事異動】

＊学部長の紹介

総合科学部長に平井松午・現学部長が選出されました。任期は平成27年4月1日～29年3月31日までの2年間。

＊副学部長の紹介

総合科学部副学部長として次の3教員が選出されました。(教育担当)に桑原 恵 教授、(研究担当)に岸江信介 教授、(社会貢献担当)に宮崎隆義 教授。任期は平成27年4月1日～29年3月31日までの2年間。

＊学科長の紹介

総合科学部人間文化学科長に田島俊郎 教授、社会創生学科長に栗栖 聡 教授、総合理数学科長に片山真一 教授が選出されました。任期は平成27年4月1日～29年3月31日までの2年間。

＊名誉教授の就任

平成27年3月31日付で退職された次の教員が徳島大学名誉教授とられました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。()内は徳島大学での在職年数。

石井健二 教授(29年)、桂 修二 教授(29年)、
中川秀幸 教授(30年9ヵ月)

＊教職員の異動

3月31日付で、次の教職員が退職されました。

原 幸一 教授(教育心理学)、増田俊哉 教授(食品機能化学)、多田正仁 准教授(マーケティング論)、大宮俊恵 准教授(道徳論)、笹尾佳代 准教授(近現代日本文学)、原田 新 特任講師(臨床心理学)

3月31日付で、次の教職員が教養教育院準備室付に異動されました。

齊藤隆仁 准教授(物性物理学)

4月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

上岡義典 准教授(教育福祉心理学)、小野公輔 准教授(解析学)、真岸孝一 准教授(物性物理学)

4月1日付で、次の教員が准教授に昇任されました。

川上竜巳 講師(環境資源利用学)、中塚健太郎 講師(コーチング論)

4月1日付で、次の教員が講師に昇任されました。

久田旭彦 助教(物性物理学)

5月16日付で、次の教職員が教養教育院準備室付に異動されました。

渡部 稔 准教授(分子生物学)

事務職員には次の方々に着任されました。

平成27年4月1日付 三好恭子(学務係主任)、近藤有紀子氏(学務係主任)

＊新任教員の着任

平成26年10月1日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

上岡義典 准教授(福祉心理学)、小田切康彦 准教授(公共政策学)、土屋 敦 准教授(社会学)、ギュンター・ディルク 准教授(英米文学)、中塚健太郎 講師(コーチング論)

平成27年4月1日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

井澤健一 教授(素粒子論)、佐原 理 准教授(デザイン表現)、シートゲス オラフ 准教授(ヤパノロジー・ドイツ語)、多田耕造 准教授(生徒指導論)、服部恒太 講師(英語学)、上野雅晴 講師(有機合成化学)、櫻井信之 講師(物理学・量子科学実験)

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。

また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 (TEL: 088-656-7021 FAX: 088-656-7012)

(E-mail: kohokakaricho@tokushima-u.ac.jp URL: http://www.tokushima-u.ac.jp)

I 学内の状況

1 企業の人事担当者が選ぶ大学総合ランキングで本学が全国6位にランクされました (日本経済新聞 平成26年6月16日朝刊掲載)

就職・転職支援の日経HRが企業の人事担当者を対象に、「対人力」や「知力・学力」「独創性」などの5項目に関して、新卒社員の出身大学のイメージ調査を実施した結果、本学は全国総合ランキング第6位にランクされ、日本経済新聞(6月16日 17面)に掲載されました。

調査は、全上場企業3,540社を対象にインターネットで実施されたものです。

本学は国公立大学出身者の評価が低かったコミュニケーション能力や主体性の高さなどで高得点を獲得し、「創造力がある」の評価は全国1位でした。

2 中村修二教授(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)がノーベル物理学賞を受賞

平成26年10月7日、中村修二教授(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)がノーベル物理学賞を受賞されました。

中村教授は徳島大学工学部の卒業生(学部:昭和52年卒業、修士:昭和54年修了)で、青色発光ダイオードの研究は本学工学研究科の博士論文となっており、中村教授のノーベル物理学賞受賞は徳島大学にとっても大きな名誉であり喜びとなりました。この度のノーベル物理学賞受賞で改めてその研究が世界の人々へ恩恵を与えるものであることが示されたものです。

また、11月3日には文化勲章を受章され、11月4日には文化功労者として顕彰されました。

平成27年2月6日には中村教授が来学され、ノーベル賞の賞金の一部を本学にご寄附くださり、寄附目録贈呈式が行われるとともに、徳島大学栄誉賞授与式を行い、香川学長から中村教授に賞状を授与しました。

中村教授から、「母校から栄誉賞をいただき、うれしく光栄です」とのコメントをいただきました。

3 本学卒業生の田中啓二所長(東京都医学総合研究所)が文化功労者として顕彰されました

平成26年11月4日、本学卒業生の田中啓二所長(公

益財団法人東京都医学総合研究所)が、タンパク質分解系の研究を包括的に進め、分子免疫学の発展に大きく貢献された業績が高く評価され、文化功労者として顕彰されました。田中所長は徳島大学医学部栄養学科を昭和47年に卒業、昭和49年に大学院修士課程を修了後、昭和51年より徳島大学医学部附属酵素研究施設助手として勤務され、平成7年に徳島大学酵素科学研究センター助教授に昇任、平成8年に東京都医学研究機構東京臨床医学総合研究所分子腫瘍学研究部門部長として転出されました。

II 学生関係

1 総合科学部学生が(公財)笹川スポーツ財団主催の「Sport Policy for Japan 2014」において最優秀賞を受賞

平成26年11月8日～9日に一橋大学で開催された「Sport Policy for Japan 2014」【主催:(公財)笹川スポーツ財団 後援:文部科学省、(公財)日本オリンピック委員会、(公財)日本体育協会】において、徳島大学チーム(総合科学部3年生:白神岬、宮元玲香、丸岡悦子、小林冬馬、指導教員:行實鉄平准教授)が最優秀賞を受賞しました。今年は、16大学32チームが参加し、徳島大学チームは初参加での最優秀賞受賞となりました。

2 卒業式・修了式

平成27年3月23日、アスティとくしまで平成26年度卒業式・修了式を挙行し、合計1,686名(学部卒業生1,204名、大学院修士(博士前期)課程436名、大学院博士(博士後期)課程46名)の卒業生及び修了生に、香川学長から学位記が授与されました。

香川学長からは「これからも学ぶことを続けてください。徳島大学で学んだことを基礎にして、地域で、日本で、そして世界でご活躍されることを祈念します。」との激励の言葉がありました。

卒業生・修了生総代として、工学部のライオンさんからは「先輩が残した功績を忘れず、これからの社会に貢献できるような人間を目指していきたいと思います。」と答辞がありました。

渭水会ホームページもご覧ください

渭水会本ホームページでは、お知らせや活動状況のご報告に加え、総合科学部構内や総合科学部が所蔵する文化財の写真などもご覧いただけます。また、トップページの「活動状況」の中には、この「渭水会々報」のホームページ版が掲載されており、ダウンロードしていただくこともできます。

会員の皆さまに、学生時代の思い出を振り返っていただけるような、親しみあるページを目指すとともに、母校の最新情報についてもお知らせしていきたいと考えております。是非、渭水会ホームページにお立ち寄りください。

ホームページURL ▶▶▶ <http://www.isuikai.jp>

※検索エンジン（google、yahoo 等）で、「渭水会」と検索いただいてもご覧いただけます。

渭水会事務局

事務局は総合科学部1号館北棟1階入り口すぐ（部屋番号1N01）です。

業務時間および連絡方法は、以下の通りです。

時間／水曜日 13：30～17：00（祝祭日および大学の休業日は除く）

TEL／088-656-7293（月～金 10：00～17：00）

FAX／088-657-7467

E-mail info@isuikai.jp（メールアドレスが変わっております）

URL <http://www.isuikai.jp>

渭水会クリアファイルを作成しました

徳島師範期成学校開校以来、様々な改革を経て総合科学部となっている母校ですが、渭水会も卒業生である正会員や在校生からなる学生会員、総合科学部の教職員などの特別会員、また物故者も数えますと2万5千人をこえる組織となりました。この度、正会員だけでなく学生会員等にも使っていただきやすい、オリジナルクリアファイルを理事の河崎良行名誉教授のデザインで作成いたしました。渭水会の会員である証として、お使いいただければ幸いです。

ご希望の方には1枚100円（送料別）でお分けしています。購入ご希望の方は、まずはお電話・FAX、またはE-mailにて渭水会事務局にお申し込みください。



編・集・後・記

渭水会々報第44号をお届けします。ご寄稿くださいました皆様には厚く御礼申し上げます。表紙は「circulation」と名づけられた上月佳代氏の作品で飾り、合わせて国民文化祭での制作過程についてご寄稿いただきました。「ご挨拶」として石井博会長と平井松午学部長にご寄稿いただきました。前者では徳島大学入学式と卒業式の様子、後者では徳島大学（常三島地区）改革プランについて執筆いただきました。「総合科学部では今（26）」としては平井学部長から社会総合科学科の概要について記していただきました。Topicsとしては石川榮作前学部長に臨時モラエス館について解説いただきました。次いで特集の「輝く新星」第1号として3名の卒業生から渭水会会長賞にまつわるお話をいただきました。次に連載の「私の職場」では警察官の職務や子育てについて小川仁美氏に、「進路通信～求人票を送付ください～」を小山晋之就職委員長に解説いただきました。

連載コラムで第6号を数える「感動が人間を育てる」を石川前学部長に記載していただきました。そして、「研究最前線」(3)は水の都・徳島市から全世界に発信された研究について山本裕史先生にご説明いただきました。次いで教育学者の南本長穂先生に引き続き、大学教員を振り返えられた渭水会会員・大宮俊恵先生の論説を掲載いたしました。また渭水会会員の内海千種先生が学長表彰を受けました。おめでとうございます。更に「総科のおたから（其の参）」に続いて、和田慧介氏の「Let's sports!」の記事を掲載いたしました。3名の卒業・修了生の「ス

タートライン」の後に、3名の「エッセイ」を華やかなカラー写真入りで飾りました。（10月14日：J）

◆大学の改革が進む中、いつもと変わらないキャンパスのユーカリの木に和んでいます（U3）

◆今号ももりだくさんな内容となり、皆様にお届けするのが今から楽しみです。次号では、唱歌「村祭」の作曲者・南能衛（徳島大学の卒業生なのです！）さんについての記事などを計画しています。知られざる渭水会会員のご活躍を今後もどんどん紹介していけたらと思っています。（ね）

◆この会報をお届けできる頃には、総合科学部本館前の黄金色に染まった樺並木が秋の深まりを教えてくれます。（Y）





ユーカリの花 (総合科学部キャンパスにて)